

# 朝 日 古 墳 群

－発掘調査報告書－

2007年3月

岩沼市教育委員会

# 朝 日 古 墳 群

— 発掘調査報告書 —

## 例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市朝日1丁目5番11号他に所在する「朝日古墳群」発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、宅地造成及び取付道路建設に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 調査に際しては、地権者である伊藤新治氏に御理解・御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
4. 発掘調査は2005(平成17)年6月9日から7月6日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は計137m<sup>2</sup>である。
5. 出土品整理及び報告書作成については、2006年5月8日から平成19年2月28日まで、岩沼市文化財展示室にて行なった。
6. 本書の第2図は岩沼市発行の1/10,000の地形図を複製して使用した。また第3図は岩沼市発行の1/2,500の国土基本図を複製して使用した。
7. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

S K ; 土坑　　S D ; 溝状遺構　　S X ; 性格不明遺構

8. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又が担当した。
9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又が撮影した。
10. 本書に関わる出土品および記録図面等は岩沼市教育委員会生涯学習課にて保管している。
11. 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます(順不同・敬称略)

相澤清利　安達訓仁　石黒伸一郎　熊谷満　斎木秀雄　佐藤則之　須田良平  
田中則和　吉井宏

宮城県教育庁文化財保護課

12. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
  - (1) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
  - (2) 縮尺は図に示すとおりである。
  - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
  - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖(小川・竹原:1973)」に掲った。

## 目 次

### 第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境 .....	1
2. 周辺の遺跡と歴史的環境 .....	2

### 第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至る経緯 .....	7
2. 調査の経過と方法 .....	7

### 第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

1. 上位平場 .....	9
A. 土坑 .....	9
B. 性格不明遺構 .....	13
2. 下位平場 .....	14
A. 土坑 .....	15
B. 溝状遺構 .....	19

### 第Ⅳ章 考察

1. 遺物について .....	21
2. 下位平場検出の土坑について .....	21

### 第Ⅴ章 まとめ

付編 昭和55年度調査「朝日古墳群」の成果概要 .....	24
-------------------------------	----

## 挿 図 目 次

第1図 岩沼市域の地形分類と調査地点 .....	1	第10図 朝日古墳群地形図 (昭和55年度作成) .....	24
第2図 岩沼市内遺跡分布図 .....	4	第11図 朝日古墳群1・2号墳 .....	24
第3図 調査区位置図 .....	7	第12図 昭和55年度の調査風景 .....	25
第4図 上位平場全体図 .....	9	第13図 昭和55年度調査出土遺物1) .....	26
第5図 上位平場遺構図・土層断面図 .....	10	第14図 昭和55年度調査出土遺物2) .....	27
第6図 下位平場全体図 .....	14	第15図 昭和55年度調査出土遺物3) .....	28
第7図 下位平場遺構図・土層断面図(1) .....	16	第16図 昭和55年度調査出土遺物4) .....	29
第8図 下位平場遺構図・土層断面図(2) .....	17	第17図 昭和55年度調査出土遺物5) .....	30
第9図 平成17年度調査出土遺物、及び 昭和55年度調査時出土中世遺物 .....	20	第18図 昭和55年度調査出土遺物6) .....	31

### 〔調査要綱〕

遺 跡 名 朝日古墳群(県遺跡登録番号:15037)

所 在 地 岩沼市朝日町1丁目5番11号ほか

調査主体 岩沼市教育委員会

調査期間 平成17年6月9日～7月6日

調査担当 岩沼市教育委員会生涯学習課

調 査 員 主査 星 誠 技師 川又隆央

# 第Ⅰ章 遺跡の概観

## 1. 位置と地理的環境(第1図)

岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5400km<sup>2</sup>を測る。当市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と、東街道が合する地点であるが、現在でも国道4号線と同6号線、JR東北本線と常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵(標高200~300m)・岩沼丘陵(標高10~100m)と、これから東へ舌状に張り出す標高10~30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に7~8kmの幅をもって発達する。この名取平野は当市域では阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本遺跡地は、この岩沼丘陵より松ヶ丘・土ヶ崎方面に派生する低位丘陵の東北部に占地している。現地表面の海拔は上位調査区で10m前後、下位調査区で7.6m前後を測る。



第1図 岩沼市の位置と地形分類

## 2. 周辺の遺跡と歴史的環境(第2図)

本地点周辺では、縄文時代から近世にかけて種々の遺跡が形成されている。以下にこれまで発掘調査によって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

### 【縄文時代】

縄文時代の遺跡としては26の鶴ヶ崎城跡がある。ここでは平成16年に調査を行なった第4地点で、土壘下より埋没小支谷で形成された遺物包含層が発見された。この遺物包含層から出土した土器は、無文で纖維混入が顕著に認められない楓木貝塚下層出土資料に類するものから、纖維混入が顕著で三角文の結節点に円形刺突文を配し、内面に条痕文を有する鶴ヶ島台式、そして同様に纖維混入が顕著で外面上に縄文、内面に条痕文を有する梨木畠式に比定される土器群であり、総じて縄文時代早期後葉に位置付けられている。出土した土器の器種は、全容が判明する資料は少ないながらも深鉢と鉢で占められている(岩沼市教育委員会2005b)。また4の北原遺跡では、平成4年に行なわれた調査の際に、断面形状がフラスコ状を呈する特異な土坑が多数確認されたほか、遺構には伴わないものの縄文時代前期及び後期に比定される土器が出土しており(宮城県教育委員会1993)、付近に該期の集落跡の存在を予見させる。

### 【弥生時代】

弥生時代の遺跡も、平成16年に調査を行なった26の鶴ヶ崎城跡第4地点で、土壘下から発見されている。ここでは土壘下に遺存していた旧表土中より弥生時代中期後葉の十三塚式期に比定される土器及び石包丁が出土したが、このほか地床炉を有する竪穴住居跡が1軒検出されている。この竪穴住居跡からは石鐵のみの出土であったが、遺構覆土は弥生時代の遺物を包含する旧表土と極めて近似した黒褐色土と判断できたことから、弥生時代中期後葉の所産であると考えている(岩沼市教育委員会2005b)。なお、1の本遺跡地においても、昭和55年時の調査の際に多量の弥生時代の遺物が出土しているが、これらについては本編末尾の付録にて記すので、ここでは割愛する。このほか宮城県教育委員会によって調査が実施された北原遺跡でも、遺構には伴わないものの弥生土器片が出土している(宮城県教育委員会1993)。

### 【古墳時代】

集落遺跡は前期遺跡である北原遺跡のほか、下野郷地区に所在する孫兵衛谷地遺跡が当市で確認されている。4の北原遺跡では1992年に県道仙台・岩沼線の改良工事に伴い発掘調査が実施されており、塙釜式期に比定される竪穴住居址が36軒確認されている。このうち、10号住居跡からは39個の土玉が出土し、生業として魚撈も行なっていたことが判明している(宮城県教育委員会1993)。名取市雷神山古墳など大規模な墳墓群の存在は、当地域にそれら首長層の勢力下にある相当数の人々がいたことを示しているが、それらの人々が生活を営んだ集落址の発見は、未だ事例の少ない低地遺跡での発掘調査の増加を待たねばならない。

高塚古墳としては8の新明塚古墳、7の長塚古墳が、横穴墓としては28の二木横穴墓群、27の丸山横穴墓群、25の土ヶ崎横穴墓群、23の引込横穴墓群、18の長谷寺横穴墓群で発掘調査が実施されている。

新明塚古墳・長塚古墳は、長岡字塚越の丘陵上に位置する古墳である。新明塚古墳では昭和25年に國學院大學によって調査が実施され、元来は円墳であると考えられていたが、調査の結果では前方後円墳であった可能性が高いことが指摘されている。古墳の長軸は16m、後円部径は9m、前方部の幅は5mであり、墳丘の高さは後円部が3m 前方部が1mを計測する。長塚古墳も昭和26年に國學院大學によって発掘調査が行われ、墳丘全体に黄褐色粘土を用いて構築されていることが確認されている。形状は有段円墳であり、古墳の規模は直径37m、高さは4.2mを計測する。しかしながら両者からは埴輪などの遺物が出土していないため、作られた年代は不明である。

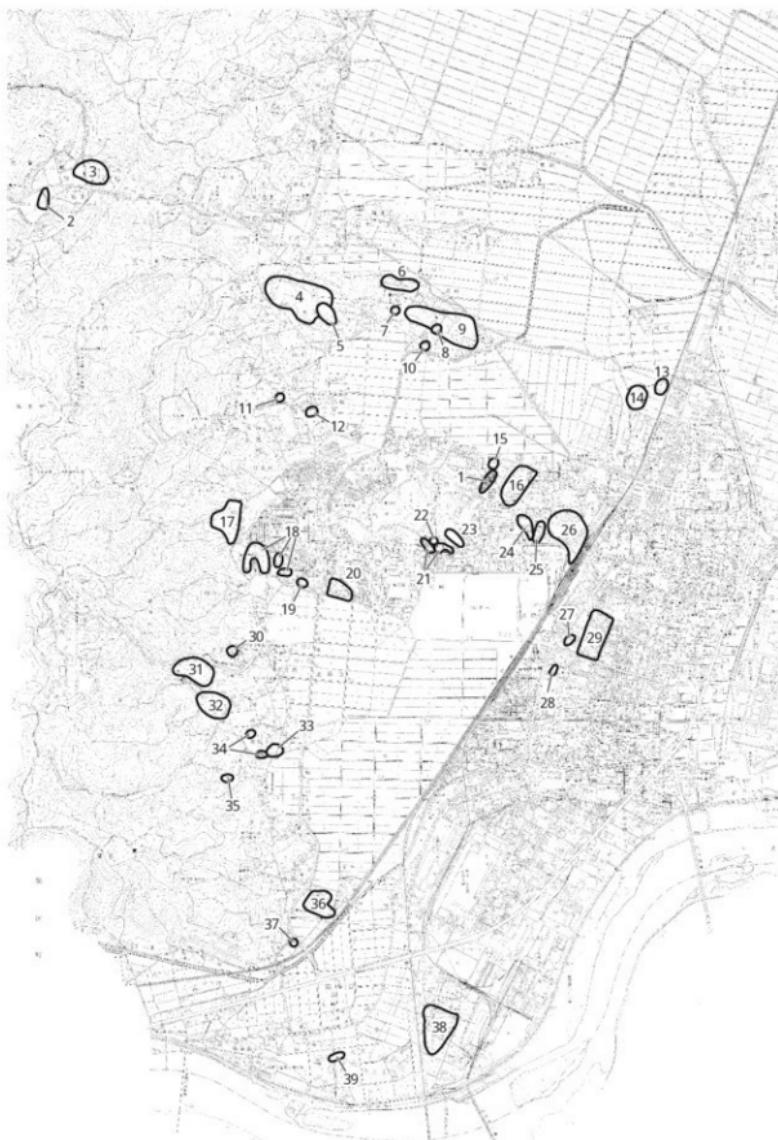
一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する、低位丘陵斜面の泥岩層露頭面で多く造営されている。市内に点在する横穴墓群は、現在までのところ9箇所で確認されている(消滅した鷺崎、石垣山横穴墓群を含む)。これらの横穴墓は、構造上では平面形が方形あるいは不整形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。出土遺物も土師器よりも須恵器の出土量が、圧倒的に凌駕するという特色を持ち、中でも湖西地域を中心とした東海諸窯、または猿投窯と推測されるフラスコ形瓶など製品が、県内の横穴墓群出土資料と比べた場合、比較的多く存在する。さらに遺存状態は劣悪なもの、これまでに多数の直刀などの金属製品も出土している。中でも二木横穴墓群では頭椎太刀の柄頭の一部が、引込横穴墓群( 岩沼市教育委員会2000 )では轡の一部が出土しており、前段階でも東北地方最大級の古墳が造営された当地域は、『国造本紀』では未記載であるが、地方有力者が存在していた可能性が高い。

### 【古代】

古代の遺構・遺物に関しては、現時点で発掘調査によって得られた知見は少ない。しかしながら出土状況は不明ながらも二木横穴墓群、長谷寺横穴墓群の出土資料中には該期に属する遺物が認められる。

なお、『延喜式』に東山道・東海道の駅家として記載され、また多賀城跡より出土した過所木簡( 東北歴史博物館2005 )でその名が知られる「玉前駅」は、本市の南部( 現在の玉崎地区 )にその存在が比定されるが、その東側に展開する38の原遺跡では、平成17・18年に実施された下水道工事の際に、古代の遺構・遺物が存在していることが明らかとなった( 千葉宗久2006 )。ここでは竪穴住居跡のカマドと考えられる焼土遺構、溝跡、柱穴などの遺構と、非ロクロ・ロクロ整形の土師器、須恵器などの出土を確認している。出土した遺物は全て古代の範疇として捉えられ、前時代のものを含まないことから、ここで発見された遺構群は「玉前駅」の設置・機能時と密接に関連した集落である可能性が高い。

また北原遺跡では、これまでに該期竪穴住居跡が1軒調査されている。この住居跡は両袖に川原石を用いて構築したカマドを有し、支脚には川原石の上に赤焼土器壊を逆位に被せて使用している。出土遺物はロクロ土師器と赤焼土器であり、形状から9世紀後半の時期と考えられる。なおこの地域は10世紀前半に編纂された『和妙類聚抄』で記載される「指賀郷」に含まれるが、古代東山道の推定ルートに近接することから、今後も集落遺跡が発見される可能性が高い。



第2図 岩沼市内遺跡分布図

No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	朝日古墳群	丘陵	弥生、古墳、中世	21	白山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
2	田中遺跡	谷底平野	縄文中・後	22	白山古墳	丘陵	古墳
3	下塙ノ入遺跡	丘陵麓	縄文晩	23	引込横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
4	北原遺跡	丘陵	旧石器、縄文早～後、弥生、古墳前	24	石垣山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
5	杉の内遺跡	丘陵斜面	縄文早・前、弥生、古墳中	25	土ヶ崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
6	長塚北遺跡	丘陵斜面	縄文、古代	26	鶴ヶ崎城跡	丘陵	縄文早・弥生中・中世・近世
7	長塚古墳	丘陵斜面	古墳中	27	丸山横穴墓群	自然堤防	古墳後
8	新明塚古墳	丘陵斜面	古墳中	28	二木横穴墓群	自然堤防	古墳後
9	上根崎遺跡	丘陵麓	縄文、古墳中	29	丸山遺跡	自然堤防	中世・近世
10	長徳寺前遺跡	丘陵麓	近世	30	古閑山遺跡	丘陵斜面	弥生、奈良
11	中ノ原遺跡	谷底平野	中世	31	新館跡	丘陵	中世
12	熊野遺跡	丘陵麓	古代	32	新館前遺跡	丘陵斜面	縄文～平安
13	かめ塚古墳	砂堆	古墳中	33	畠提上貝塚	丘陵斜面	縄文早・前、古代
14	かめ塚西遺跡	砂堆	弥生、古墳	34	畠堤上横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
15	鷺崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	35	根方泉遺跡	丘陵麓	弥生
16	朝日遺跡	丘陵	古墳、古代	36	長谷古館跡	丘陵	室町
17	竹倉部遺跡	丘陵麓	古墳～古代	37	東平王塚古墳	丘陵麓	古墳
18	長谷寺横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	38	原遺跡	自然堤防	古代
19	平等山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	39	南玉崎遺跡	自然堤防	古代
20	新田遺跡	丘陵斜面	縄文、古墳、古代				

第1表 遺跡地名表

### 【中世】

発掘調査で中世遺跡の存在が確認できたのは、26の鶴ヶ崎城跡、29の丸山遺跡、11の中ノ原遺跡、及び下野郷館跡である。鶴ヶ崎城跡では第4地点の調査で15世紀前半頃の年代観が与えられる青磁盤や常滑焼碗片などが出土し、さらに中世から近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土壘が確認された。この土壘の最終形態は基底部9.3mで、平場内よりの比高差は約2mを測る(岩沼市教育委員会2005b)。丸山遺跡では平成18年度に実施された調査の際に遺構には帰属しないものの、産地不明の中世陶器碗片が出土している。中ノ原遺跡では発掘調査は未実施ではあるが、平成17年度に実施した分布調査の折に移設された板碑の付近より常滑焼碗片が採取された。この陶器片の内面には火葬骨片が付着していたことから骨蔵器としての使用が考えられ、板碑に伴って埋葬されたものと推量している。市域東部に存在する下野郷館跡では平成12～15年度にかけて行なわれた調査の際に、13世紀後半頃の年代観が与えられる白石古窯跡群碗片のほか、12世紀後半の年代観を有する白磁碗片、及び13世紀代と考えられる青磁碗片が出土していることから、五間堀川の自然堤防上に中世遺跡が営まれていたことが明らかとなっている(岩沼市教育委員会2004a)。

### 【近世】

近世の遺構・遺物は、26の鶴ヶ崎城跡、29の丸山遺跡、10の長徳寺前遺跡、及び下野郷館跡で確認されている。鶴ヶ崎城跡ではこれまで4地点で調査が行われているが、このうち第1

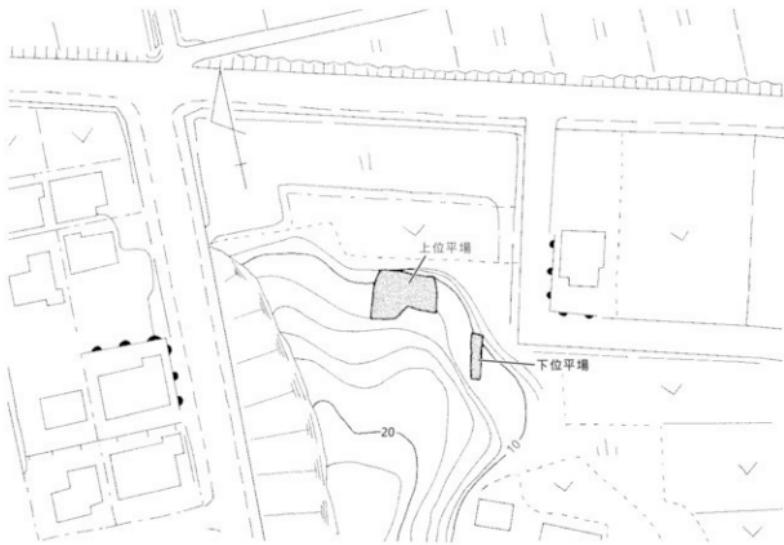
地点では東北福祉大学によって、平成18年まで6次に渡って調査が実施されている(東北福祉大学2002～2007)。ここでは丘陵頂部の平場で南北に走方向を持つ石列と、これの西側でほぼ併走しながら北側では東側に屈曲する溝跡が確認されている。また礎石建物跡、通路状遺構も確認されている。さらに第5次では小穴に大堀相馬焼碗を、第6次調査では同じく小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらけで蓋をするように被せた状態のものが検出された。この2例は現時点では地鎮関連の遺構として解釈されている(東北福祉大学2007)。このほか第2地点では掘立柱建物跡、土坑、及び近現代の大規模な地形変更の痕跡が確認され(岩沼市教育委員会2004b)、第3地点では掘立柱建物跡、魚骨を含む溝跡などが発見されている(岩沼市教育委員会2004c)。上記の3地点ではいずれも18世紀後葉～19世紀代の遺物を主体として出土している。

長岡字塚腰に所在する長徳寺前遺跡では、平成15年に曹洞宗龍谷山長徳寺(1657年開山)門前の現市道下より2基の礎石経塚が発見されている。経塚はいずれも墳丘を有しておらず、1号経塚が径1.4mほどの円形、2号経塚は1辺が1.0mほどの方形土坑の底面に厚さ40～60cmにわたって礎石経が埋置されていた。出土した礎石経の総点数は、1号経塚が14,897点、2号経塚は11,479点である。このうち文字判読可能なものは1号経塚で10,089点、2号経塚で6,329点であり、文字の遺存状態はかなり良好である。書写経について、1号経塚では妙法蓮華經譬喻品第三、方便品第二、信解品第四を中心に書写したものと考えられ、2号経塚では仏說觀普賢菩薩行法經に関連する文字が多数あり、仏說觀普賢菩薩行法經を中心に、妙法蓮華經各品の代表的な部分を書写したと考えられる。2基の礎石経塚の築造年代は、それぞれ1号経塚が唐津産陶器の年代観から17世紀後半頃、2号経塚が「奉讀誦書寫大乘妙典一百部一字一石金剛塔」の年号(文政7年)から19世紀前半頃と考えられる(岩沼市教育委員会2005a)。

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯(第3図)

平成17年5月26日に岩沼市教育委員会(以下、市教委)に朝日1丁目5番11号他の宅地造成開発計画が寄せられた。開発対象地が県の遺跡台帳に登録されている『朝日古墳群』の範囲に含まれていることから、市教委では5月27日に現地踏査を実施した。その結果、小規模な平場状遺構と緩斜面の存在が確認できたことから、遺構が遺存している可能性を考慮した報告を県教育文化財保護課(以下、県教委)に行なった。県教委は報告を受け、6月3日に市教委と合同で現地踏査を行ない、市教委及び地権者に対して開発工事に併行した工事立会いが必要であると回答した。これを受けて市教委では、6月7日より工事立会いを実施したが、途中で遺構・遺物が確認できたことから発掘調査への切り替えを行なった。



第3図 調査区位置図(  $S = 1 / 1,000$  )

### 2. 調査経過と方法(第7図)

調査は平成17年6月9日から実施した。設定した調査区の面積は上位平場は $117m^2$ 、下位平場は $20m^2$ である。調査はまず区内に自生する立木や草木の伐採を行なった。その後、重機によって表土の除去を行い、遺構面の検出に努めた。作業の経過は以下の通りである。

6 / 5	現地での掘削範囲の縄張り設定
6 / 7	重機による表土掘削の開始(下位平場)、遺構精査
6 / 8	上位平場下の畝地掘削
6 / 9	上位平場表土掘削、遺構精査

6 / 14	上位平場第一次全景(遺構確認状況)
6 / 17	上位平場遺構掘り下げ、土層図の作成・写真撮影
6 / 20	上位平場第二次全景(遺構掘削後)
6 / 21	測量軸のトラバース、海拔点移動
6 / 22	上位平場遺構平面図作成
6 / 23	下位平場遺構精査
6 / 30	下位平場第一次全景(遺構確認状況)
7 / 1	下位平場遺構掘り下げ、土層図の作成・写真撮影
7 / 5	下位平場第二次全景(遺構掘削後)
7 / 6	機材撤収

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点3- 124( X ; - 209, 234. 835、Y ; 2, 344. 991)と同524である。これにより上位平場では調査対象地北東の X ; - 209, 296. 000、Y ; 2, 442. 000の地点に A- 1 杣を設定し、東西ライン( X 軸 )にアルファベットを北からA~Dと、南北ライン( Y 軸 )に算用数字を東から 1 ~ 5 と附した( 第4図 )。また下位平場では調査対象地北東の X ; - 209, 312. 000、Y ; 2, 448. 000 の地点に A- 1 杣を設定し、東西ライン( X 軸 )にアルファベットを北からA~Dと、南北ライン( Y 軸 )に算用数字を東から 1 ~ 3 と附した( 第5図 )。各グリッドライン間の距離は 4 m である。

また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

出土品の整理作業・報告書の作成は平成18年5月8日から平成19年2月28日にかけて岩沼市文化財展示室内で断続的に行なった。

## 第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、丘陵北側上位に位置する緩やかな緩斜面と、丘陵東側の裾部付近に存在する平場上の地形の2箇所で遺構が発見されている。発見された遺構は、それぞれ異なった年代観が与えられることから、ここでは上位より発見された遺構群を「上位平場」、下位より発見された遺構群を「下位平場」と呼称して報告する。

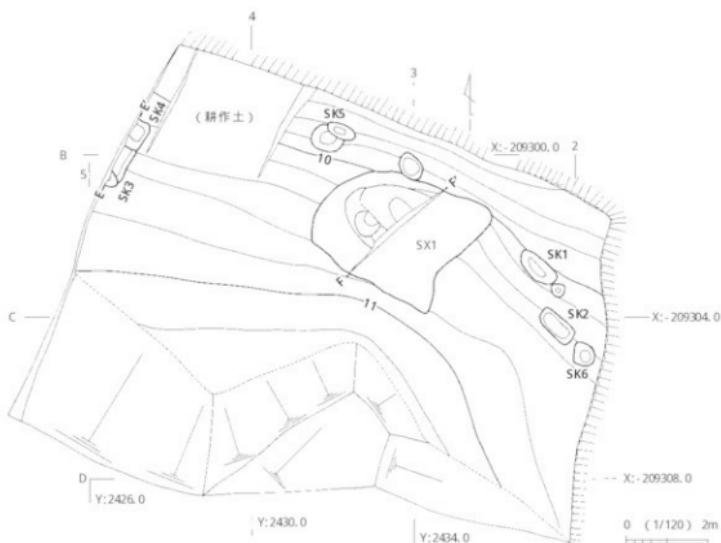
### 1. 上位平場(第4図)

上位平場の掘削前の状況は、南側で尾根を段切りしてほぼ水平な平場状の地形となっていた。しかしながら、調査の過程で北側には耕作土及び旧表土が約1mほどと厚く堆積し、遺構確認が困難であることが判明したため、これらを除去した赤褐色ローム質土、及びにぶい黄褐色シルト上面で遺構検出を行なった。発見された遺構は土坑6基、性格不明遺構1基、ピット1口である。以下にその内容を詳述する。

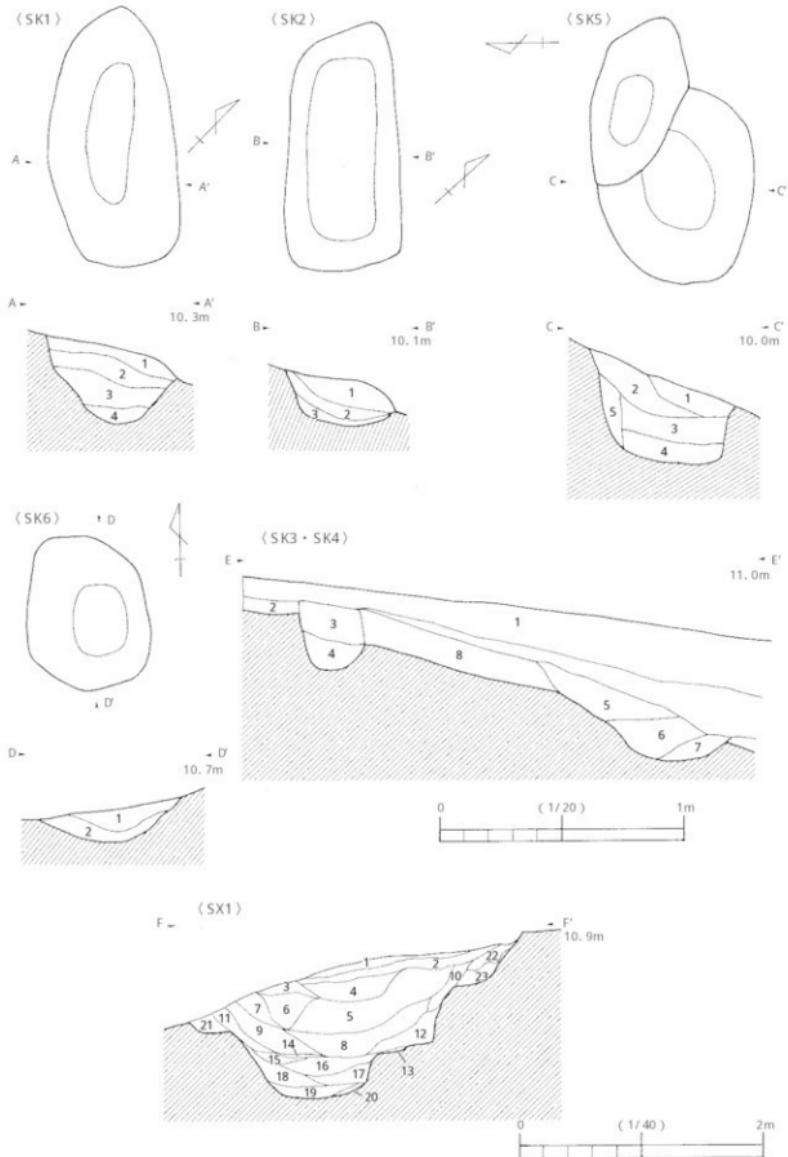
#### A. 土坑

##### S K 1(第5図)

調査区北東部の2Bグリッドに位置する。平面形状は長円形で、規模は長軸1.05m 短軸0.54m 確認面よりの深さは20cm(海拔約9.8m)である。主軸方位はN-44°-Wを測る。遺構



第4図 上位平場全体図



第5図 上位平場遺構図・土層断面図

## 上位平場遺構 土層注記

S K 1

No	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト 石英を多く含む
2	褐色	( 7.5YR4/1 )	シルト 石英をやや多く含む

S K 2

No	土 色	土 質	特 徴
1	黒色	( 10YR3/1 )	シルト 石英をやや多く含む
2	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト 石英を多く含む
3	暗褐色	( 10YR3/3 )	シルト 地山ブロックをやや多く含む

S K 3・4

No	土 色	土 質	特 徴
1	暗褐色	( 10YR3/3 )	シルト 耕作土
2	暗褐色	( 10YR3/4 )	シルト 耕作土。しまり強い
3	黒褐色	( 10YR2/2 )	シルト 石英をやや多く含む
4	にぶい黄褐色	( 10YR4/3 )	シルト 地山ブロックをやや多く含む
5	黒褐色	( 10YR3/1 )	シルト 褐色スコリア・石英を少量含む
6	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト にぶい黄褐色スコリアをやや多く含む
7	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト にぶい黄褐色スコリアを多量含む
8	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト 褐色ブロック・炭化物を微量含む
9	暗褐色	( 10YR3/3 )	シルト 石英微量含む

S K 5

No	土 色	土 質	特 徴
1	暗褐色	( 7.5YR3/3 )	シルト 石英をやや多く含む
2	黒褐色	( 7.5YR3/2 )	シルト 石英を多量、地山粒を微量含む
3	灰黄褐色	( 10YR4/2 )	シルト 地山粒やや多く、石英微量含む
4	黄褐色	( 10YR5/6 )	地山ブロック極めて多量含む
5	灰黄褐色	( 10YR4/2 )	地山粒やや多く、石英微量含む

S K 6

No	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト 石英を多く含む
2	暗褐色	( 10YR3/3 )	シルト 地山ブロックをやや多く含む

## S X 1

N <sub>o</sub>	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	( 10YR3/2 )	シルト 石英やや多く含む
2	褐灰色	( 7.5YR4/1 )	シルト 石英を多く、にぶい黄橙色シルトを多量含む
3	にぶい黄褐色	( 10YR5/4 )	シルト やや粘性のある砂質泥岩層
4	にぶい黄橙色	( 10YR7/3 )	砂質シルト しまり弱い
5	にぶい黄橙色	( 10YR6/4 )	砂質シルト 灰白色砂岩をやや多く含む
6	褐色	( 10YR4/6 )	シルト 青灰色泥岩塊を少量含む
7	にぶい黄褐色	( 10YR4/3 )	褐色シルトをやや多く含む
8	にぶい褐色	( 7.5YR5/4 )	褐色シルト・灰白色砂岩を少量含む
9	黒褐色	( 10YR3/2 )	褐色シルト粒少量、炭化物を微量含む
10	灰黄褐色	( 10YR5/2 )	灰白色砂岩少量、炭化物を微量含む
11	黒褐色	( 10YR3/2 )	しまりやや強い。石英をやや多く、褐色シルトを微量含む
12	にぶい黄橙色	( 10YR6/4 )	砂質シルト 灰白色砂岩と灰黄褐色シルトの混合層
13	黒褐色	( 10YR3/2 )	炭化物をやや多く含む
14	にぶい黄橙色	( 10YR6/4 )	砂質シルト 黒褐色シルト微量含む
15	黒褐色	( 10YR2/2 )	黄褐色シルト・炭化物を微量含む
16	にぶい黄橙色	( 10YR7/4 )	砂質シルト 青灰色泥岩粒を少量、褐色シルト微量含む
17	にぶい黄橙色	( 10YR7/4 )	砂質シルト しまり強い。灰白色砂岩をやや多く含む
18	黒褐色	( 10YR2/3 )	しまり強い。黄褐色シルトをブロック状にやや多く含む
19	黄褐色	( 10YR5/6 )	しまりやや弱い。炭化物微量含む
20	灰黄褐色	( 10YR4/2 )	砂質シルト 黑褐色シルト少量含む
21	暗褐色	( 10YR3/3 )	黄褐色シルト少量含む
22	暗褐色	( 10YR3/4 )	シルト 石英を少量、炭化物を微量含む
23	明黄褐色	( 10YR6/6 )	シルト 風化した凝灰岩粒を含む

覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色・黒色・褐色シルトを主体として構成される。上層の黒褐色シルト中には石英粒を多く含んでいる。

遺物は弥生土器小片が出土しているが、細片のため実測不可。

#### S K 2( 第5図 )

調査区東側の2B・2Cグリットに位置する。平面形状は長方形で、規模は長軸0.96m 短軸0.46m 確認面よりの深さは25cm( 海抜約10.3m)である。主軸方位はN 50° -Wを測る。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒色・黒褐色・明褐色シルトを主体として構成される。上層の黒色シルト中には石英粒を多く含んでいる。

遺物はすべて弥生土器片であり、このうち第9図6に高杯片を図示した。

#### S K 3( 第5図 )

調査区北西部の4A・4Bグリットに位置する。調査区西側へさらに展開するため平面形状・規模・主軸方位については不明である。確認面よりの深さは35cm( 海抜約10.6m)である。SK4とピットと重複関係にあり、两者より古い。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色シルトを主体として構成される。

遺物はすべて弥生土器片であり、このうち第9図1・2に壺片を図示した。( 第6図 )

#### S K 4( 第5図 )

調査区北西部の4Aグリットに位置する。調査区西側へさらに展開するため平面形状・規模・主軸方位については不明である。確認面よりの深さは23cm( 海抜約10.2m)である。SK3と重複関係にあり、これより新しい。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色シルトを主体として構成される。

遺物はすべて弥生土器片であり、このうち第9図4に壺片を図示した。

#### S K 5( 第5図 )

調査区北側の3Aグリットに位置する。平面形状は隅丸方形で、規模は長軸0.81m 短軸0.63m 確認面よりの深さは45cm( 海抜約9.4m)である。主軸方位はN 90° -Wを測る。北側の一部でピットと重複し、これより古い。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色・暗褐色・灰黄褐色シルトなどを主体として構成される。上層の黒褐色シルト中には石英粒を多く含んでいる。

遺物はすべて弥生土器片であり、このうち第9図5に壺片を図示した。

#### S K 6( 第5図 )

調査区北東部の2Bグリットに位置する。平面形状は長円形で、規模は長軸0.59m 短軸0.48m 確認面よりの深さは20cm( 海抜約10.3m)である。主軸方位はN 5° -Eを測る。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色・褐色シルトを主体として構成される。上層の黒褐色シルト中には石英粒を多く含んでいる。

遺物は弥生土器小片が出土しているが、細片のため実測不可。

## B. 性格不明遺構

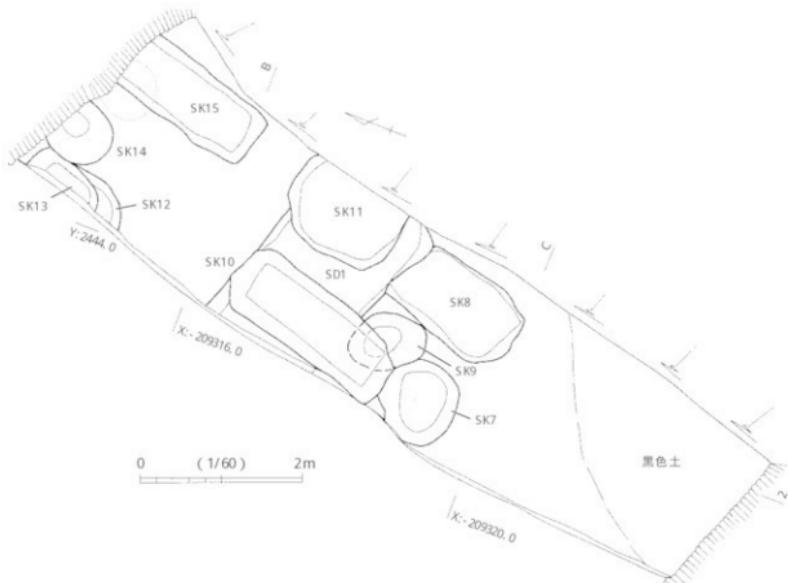
## S X 1(第4・5図)

調査区中央部北側の2B・3Bグリットに位置する。本址は風倒木痕の可能性が考慮されるが、遺物の出土が多いことから性格不明遺構として扱う。平面形状は不整形で、規模は長軸3.3m 短軸3.15m 確認面よりの深さは1.1m(海拔約9.5m)である。遺構覆土は黒褐色・にぶい黄褐色・にぶい黄橙色シルトを主体として構成され、層全体に地山である褐色または赤褐色シルトブロックを多量に含む。

遺物はすべて弥生土器片であり、上位平場では最も多い20点が出土している。しかしながら大半は細片であり、図示可能なものは第9図3の壺片のみである。

## 2. 下位平場(第6図)

下位平場の掘削前の状況は、西側では緩斜面との境に不明瞭ながらも段を有し、東側で裾部の一部を削平されているものの、南北に細長い段切りしてほぼ水平な平場状の地形となっていた。表土除去後に精査したところ、北側では基盤層である泥岩を削平しているが、中央部では弥生土器包含層を包括する埋没小支谷に破碎泥岩を用いて地業して平坦面を作り出していることが確認された。遺構検出はこの整地面・岩盤削平面で行ない、土坑9基、溝状遺構1条を見している。



第6図 下位平場全体図

## A. 土坑

### S K 7( 第8図 )

調査区中央部西側の2Bグリットに位置する。平面形状は橢円形で、規模は長軸1.0m 短軸0.8m 確認面よりの深さは34cm( 海抜約7.3m)である。主軸方位はN-85° -Eを測る。遺構覆土はすべて人為的埋土であり、にぶい黄褐色・褐色シルトを主体として構成され、層全体に1~5cm大の泥岩小塊を含む。遺物は出土していない。

### S K 8( 第8図 )

調査区中央部東側の1Bグリットに位置する。S D 1と重複し、これより古い。平面形状は北側の一部が重複により不明ではあるがほぼ長方形を呈し、規模は短軸0.94m 確認面よりの深さは22cm( 海抜約7.3m)である。主軸方位はN-15° -Eを測る。遺構覆土はにぶい黄褐色シルトの1層であり、人為的埋土である。層全体には3~10cm大の泥岩小塊、炭化物を含む。なお底面付近では骨粉状の物質も、ごく微量ではあるがみとめられた。遺物は出土していない。

### S K 9( 第8図 )

調査区中央部の1B・2Bグリットにかけて位置する。S K 10と重複し、これより古い。平面形状は橢円形を呈し、規模は長軸0.96m 短軸0.66m 確認面よりの深さは47cm( 海抜約7.1m)である。主軸方位はN-30° -Eを測る。遺構覆土はにぶい黄褐色・暗褐色・黄褐色シルトなどで構成され、すべて人為的埋土である。層全体には3mm~拳大の泥岩塊、炭化物を含むが、炭化物は上層に多く含まれている。

遺物は第9図12に図示した外面に線刻を有する常滑焼の甕片が出土している。

### S K 10( 第7図 )

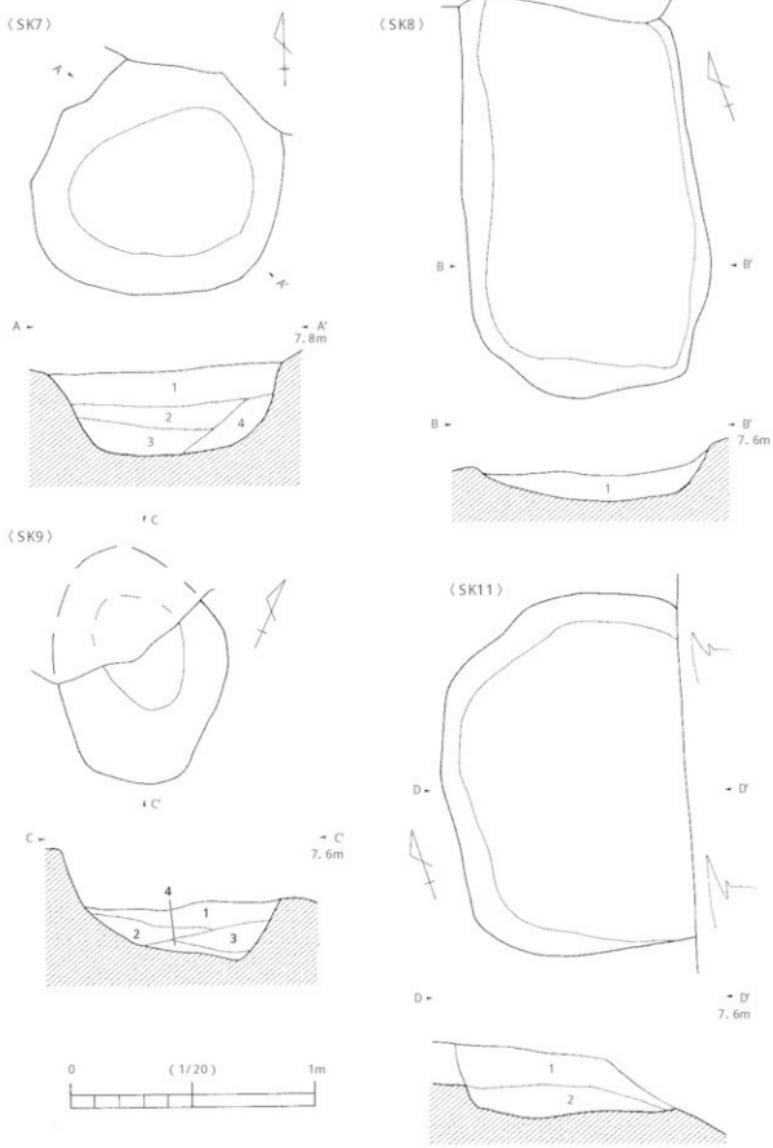
調査区中央部の1B・2Bグリットにかけて位置する。S K 9・S D 1と重複し、いずれよりも新しい。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸2.26m 短軸0.84m 確認面よりの深さは68cm( 海抜約6.8m)である。主軸方位はN-16° -Eを測る。遺構覆土は黄褐色・にぶい黄褐色シルトで構成され、すべて人為的埋土である。層全体には泥岩小塊、炭化物を含むが、炭化物は上層に多く含まれている。なお、遺構底面では黒色砂が薄く堆積し、下層付近では砂質感が強い。

遺物は第9図9に図示した在地産と考えられる中世陶器の甕片が出土している。

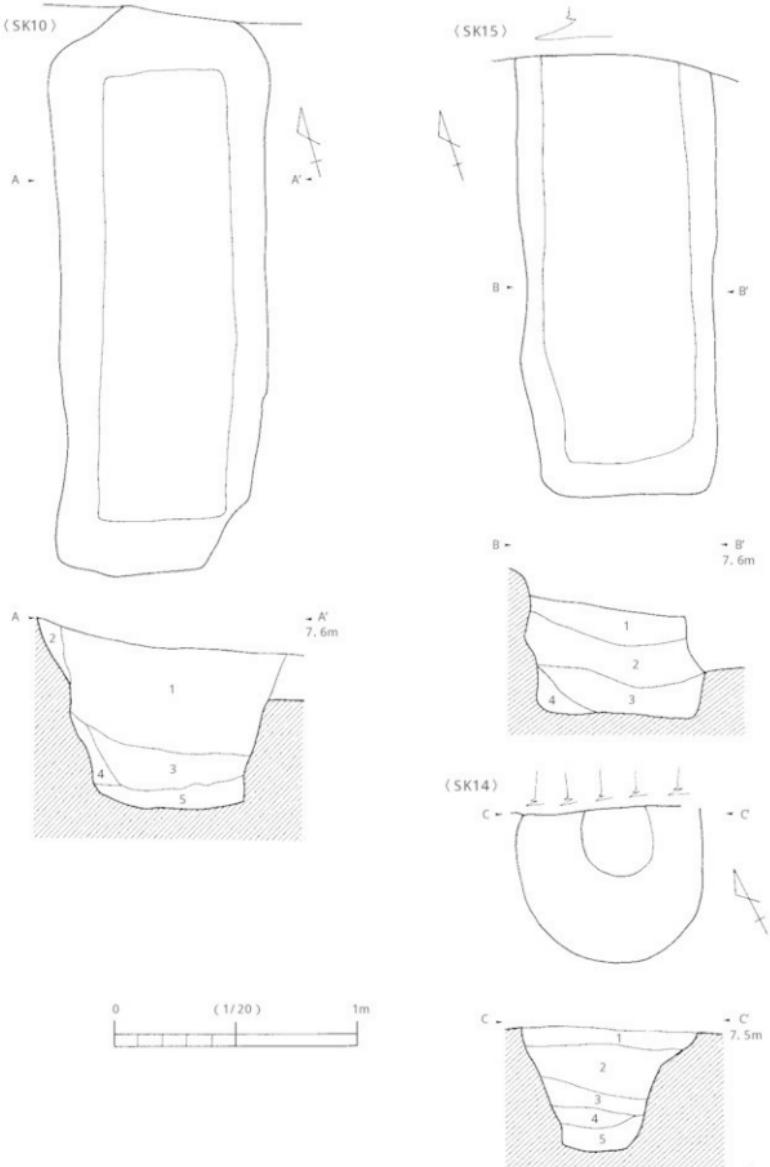
### S K 11( 第8図 )

調査区中央部東側の1Bグリットに位置する。S D 1と重複し、これより新しい。本址の東側では既掘削により平面形状は不明な点もあるが、概ね橢円形を呈するものと考えられる。規模は長軸1.48m 確認面よりの深さは30cm( 海抜約7.1m)である。主軸方位はN-8° -Eを測る。遺構覆土は黄褐色・にぶい黄褐色シルトの二層で構成され、すべて人為的埋土である。上層には炭化物が多く含まれ、下層付近では砂質感が強い。なお底面付近では骨粉状の物質も部分的に存在した。

遺物は第9図10に図示した在地産と考えられる中世陶器の甕片が出土している。



第7図 下位平場遺構図・土層断面図(1)



第8図 下位平場遺構図・土層断面図(2)

下位平場遺構 土層注記

S K 7

No	土 色	土 質	特 徵
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	泥岩粒・炭化物を少量含む
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む
3	オリーブ褐色 (2.5Y4/4)	シルト	泥岩粒をやや多く含む
4	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	泥岩粒を多量、炭化物を少量含む

S K 8

No	土 色	土 質	特 徵
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物をやや多く、泥岩小塊・泥岩粒を少量含む

S K 9

No	土 色	土 質	特 徵
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	炭化物を多量、拳大の泥岩塊を少量含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	泥岩粒を少量含む
3	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	泥岩粒をやや多く、炭化物を微量含む
4	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	シルト	粘性やや強い。泥岩粒を微量含む

S K 10

No	土 色	土 質	特 徵
1	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	泥岩粒を極めて多量、炭化物をやや多く含む
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物をやや多く、泥岩粒を少量含む
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む
4	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	しまりやや弱い。やや砂質感あり。炭化物微量含む
5	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	シルト	底面直上では黒褐色砂を少量確認。泥岩小塊やや多く含む

S K 11

No	土 色	土 質	特 徵
1	灰オリーブ色 (5Y5/2)	シルト	泥岩小塊を多量、炭化物を微量含む
2	オリーブ褐色 (2.5Y4/2)	シルト	泥岩粒をやや多く、炭化物を微量含む

S K 14

No	土 色	土 質	特 徵
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	泥岩粒を少量、炭化物を微量含む
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	泥岩粒を極めて多量、炭化物をやや多く含む
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	やや砂質感あり。炭化物を微量含む
4	灰白色 (10YR8/2)	シルト	泥岩主体層。炭化物を極めて微量含む
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	泥岩粒を少量、炭化物を微量含む

S K 15

No	土 色	土 質	特 徵
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	泥岩粒・炭化物を微量含む
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	泥岩粒をやや多く、炭化物を少量含む
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	泥岩粒を多量、炭化物をやや多く含む。古銭出土層。底面直上では黒褐色砂を少量確認
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	やや砂質感強い。炭化物を微量含む

#### S K 1 2( 第 6 図 )

調査区北西部の 1 A グリットに位置する。S K 1 3と重複し、これより古い。また調査区西側へさらに展開するため平面形状・規模・主軸方位については不明である。確認面よりの深さは10cm( 海拔約 7.5m)である。遺構覆土はすべて自然堆積であり、黒褐色シルトを主体として構成される。遺物は出土していない。

#### S K 1 3( 第 6 図 )

調査区北西部の 1 A グリットに位置する。S K 1 2と重複し、これより新しいが調査区西側へさらに展開するため平面形状・規模・主軸方位については不明である。確認面よりの深さは54cm( 海拔約 7.0m)である。遺構覆土は黒褐色・暗褐色シルトで構成され、すべて人為的埋土である。層全体には泥岩粒を多く含んでいる。遺物は出土していない。

#### S K 1 4( 第 7 図 )

調査区北部の 1 A グリットに位置する。本址の北側は既掘削によって失われているため平面形状・規模・主軸方位については不明な点があるが、短軸0.75m 確認面よりの深さは78cm( 海拔約 6.8m)である。遺構覆土は暗褐色・にぶい黄褐色・黒褐色シルトなどで構成され、すべて人為的埋土である。上層では炭化物、下層では泥岩粒を多く含み、最下層付近では砂質感が強い。遺物は出土していない。

#### S K 1 5( 第 7 図 )

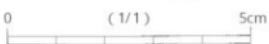
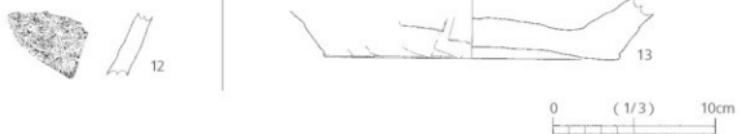
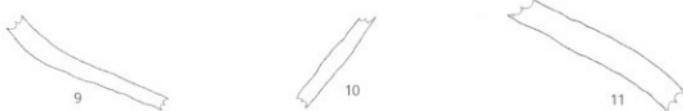
調査区北部の 1 A グリットに位置する。本址の北側は既掘削によって失われているため平面形状・規模・主軸方位については不明な点があるが、S K 1 0 同様に長方形を呈するものと思われる。また短軸0.8m 確認面よりの深さは52cm( 海拔約 7.1m)である。主軸方位はN-13° - E を測る。遺構覆土は暗褐色・にぶい黄褐色シルトなどで構成され、すべて人為的埋土である。層全体には泥岩小塊、炭化物を含むが、炭化物は下層に多く含まれている。なお、遺構底面では黒色砂が薄く堆積し、下層付近では砂質感が強い。

遺物は第 9 図11に図示した在地産と考えられる中世陶器の甕片が上層から、また第 9 図14~21に図示した古銭13枚が下層付近より出土している。なお古銭には発見当時、ワラ状のものを編んだ植物遺存体が付着していた。

### B . 溝状遺構

#### S D 1( 第 6 図 )

調査区中央部の 1 A ・ 1 B グリットにかけて位置する。S K 8、S K 1 0、S K 1 1 と重複し、S K 1 0、S K 1 1 より古く、S K 8 より新しい。規模は短軸1.6m 確認面よりの深さは20cm( 海拔約 7.2m)である。遺構覆土は褐色シルトの 1 層であり、人為的埋土である。層全体には 1 ~ 2 cm 大の泥岩粒をやや多く含む。遺物は出土していない。



第9図 平成17年度調査出土遺物、及び昭和55年度調査出土中世遺物

## 第IV章 考察

### 1. 遺物について

#### - 弥生時代・土器 -

本地点で発見された弥生土器は上位平場の遺構群、旧表土中と下位平場整地層下の遺物包含層から出土したものである。これらには半載竹管状工具を用いて描かれた2本1単位の並行沈線によって施文されるもの(第9図2・5・6・7)、縄文が施文されるもの(第9図1・3)、無文のもの(第9図4・8)の3者がある。器種は壺形土器・高坏の概ね2者である。なお、並行沈線による施文は①円形を呈するもの、②斜状を呈するもの、③横位と縦位を組み合わせたもの、の3者がある。これらの土器は棋形圓式、十三塚式に比定され、本地点で弥生時代に生活が営まれた時期としては弥生時代中期中葉～後葉を中心とした時期と考えられる。

#### - 中世・陶器 -

中世の遺物は陶器と古銭があるが、出土量は概して少ない。陶器は甕と壺であり、常滑産(第9図12)と在地産(第9図9～11)の2者がある。この在地産のうち第9図10は胎土の特徴から東北窯跡や一本杉窯跡に代表される白石諸窯の製品と考えられる。また第9図11は、胎土は軟質であり、また焼成も良好ではないという特徴を持つが、管見に触れた限りでは村田町菅生館跡(村田町教育委員会2006)でもみとめられることから、宮城県南部域で生産された製品である可能性が高い(註1)。

ところで今回出土した資料以外に、昭和55年度に実施された調査でも中世陶器が出土している(第9図13)。これは甕底部片であるが、胎土の特徴から白石諸窯の製品である可能性が高い。しかしながら昭和55年度資料、及び今回出土した中世陶器では年代観の有力な手がかりとなりうる口縁部片が一切出土していない。このため個々の遺構・遺物については明確な年代観については不明な点も多いが、後述する土坑墓の年代観から概ね13世紀後半から15世紀代にかけての時期の所産であると考えている(註2)。

#### - 中世・古銭 -

古銭はすべてSK15内より出土している。総数では13枚出土しているが、遺存状態は良好とは言えず、銭種が判明できるものはわずか8枚のみである。出土状況は前述のとおり遺構南側の底面付近でまとまって出土しているが、この下面にはワラ状のものを編んだ植物遺存体が付着していたことから、袋状の容器に入れて埋納したものと考えられる(註3)。

出土した古銭のうち、銭種が判明したものはすべて北宋銭である。わが国では中世期を通じて中国より輸入した銭貨が流通しているが、今回発見された古銭はこのうち初鋤年が最も古いものでは景祐元寶(1034年)であり、最新は元祐通寶(1086年)という、年号としては比較的まとまりのある資料となっている。

### 2. 下位平場検出の土坑について

本地点では、上位平場と下位平場という二つの地点において弥生時代、中世の遺構が確認さ

れている。特に下位平場で確認された土坑では、SK15で副葬品として北宋銭が13枚出土したことから当市では初の確認事例となる中世墓として注目され、さらに平場全体が墓域であったと考えられる。

中世墓の研究は近年盛んな研究分野もあるが、中でも宮城県内の事例については田中則和氏が精力的にまとめられており、氏の論考(田中則和2005)をもとにして本地点の状況を照らし合わせてみる。

SK10及びSK15は、壁面はともに直立しており、全体的に細長い形状を呈する。このような特徴を持つ土坑は土葬土坑墓と称される。本地点で確認されたこれらの土坑は主軸方位は北東方向であり、おそらくは頭部を北へ向けて埋葬したものと思われるが、類例としては仙台市太白区に所在する柳生台畠遺跡(仙台市教育委員会1998)、登米市津山町柳津館山遺跡(宮城県教育委員会1984)、仙台市宮城野区中野高柳遺跡で確認された事例がある。これらは立地や遺構の検出状況とその周辺の土地空間利用のあり方から、都市民の墓域、城主等の墓所、屋敷墓などに分類される。このように周辺の状況に主眼を置いてみた場合、本地点は近世に描かれた『奥州岩沼城図』(白石市教育委員会所蔵)では「山守」の名称が見られる地点に相当すると考えられることから、中世期においても小規模な在地領主、あるいは富裕農民層の拠点となっていた可能性が考慮される。また今回確認された小規模な平場状の地形は、本遺跡が存在する丘陵東斜面において複数認めることができ、同様の遺構のあり方が展開するものと考えられることから、この丘陵斜面一帯が一族、あるいは集落構成員の墓域であった可能性が推量できるであろう。

SK8・11の両者については、比較的浅い掘込であること、及び遺骨等の出土は明瞭ではないものの、部分的に骨粉状の物質がみとめられたことから墓坑であると考えている。しかしながら葬法については、前述のSK10・15が長軸に比して短軸が小さいことから伸展葬であったとすると、これとは異なって長軸に比して短軸が大きいことから屈葬であった可能性が考慮される。なお、SK8、10、11、15のいずれからも鉄釘あるいは竹釘の出土はなく、また土層観察でも木棺を埋葬したことを推量できるような土層堆積がみとめられないことから、墓坑内に直接遺骸を埋置した可能性が高い。

ところで、SK10・15では遺構底面付近において他の遺構、及び周辺の遺跡ではあまり目にしてことのない風成砂に近似した黒色砂が少量確認されている。密教では葬送儀礼の際に「土砂加持法会」という、祈祷した土砂を遺骸等に降りかけるという儀式があり、科学的な分析は行つてはいないが本地点で確認された黒色砂は明らかに遺跡外よりもたらされたものであることから、この「土砂加持法会」の際に用いられた可能性がある。未確定な要素は多々あるが、中世のこの地域では密教に関連した葬送儀式が行われたことを示す一つの資料となり得るものとして注目される。

なお、下位平場遺構群の年代観であるが、宮城県内では土葬土坑墓は9世紀後半から出現し、10世紀後半から12世紀後半にかけては不明なもの、その後は多少の増減はありながらも、以後連続と継続する。その中で田中氏は時期が下るにつれて土坑幅に対して長さが短くなるという傾向を指摘している。また土葬土坑墓群は当地域では「14世紀のおそらくは後半段階」に

出現するとしている(田中2005)。本地点のSK10は氏が設定した中世に比定される数値を大幅に凌駕しているが(註4)、古代遺物を一切出土せず中世遺物のみが出土している現状では中世段階の造営を考慮すべきであり、その年代観について上限は白石諸窯の製品の存在から13世紀後半以降とし、洪武通寶や永楽通寶、さらには寛永通寶を含まないことから下限は15世紀代と幅広く捉えておきたい。

## 第V章　まとめ

- ①朝日古墳群は、岩沼市朝日一丁目に所在する。
- ②朝日古墳群は、もとは4基の円墳が丘陵尾根上に存在していたとされるが、昭和55年の宅地造成工事の際に2基を調査したものの、その後消滅している(詳細は付編参照)。
- ③昭和55年度の調査では、古墳墳丘盛土内より弥生土器片が多く出土していることから、周辺に弥生時代の集落跡の存在が予見された。今回の調査では住居跡は確認できなかったものの、上位平場では弥生時代中期後葉を中心とした時期の土器片が土坑内より少量出土している。
- ④東側斜面裾部に位置する下位平場では、岩盤面を削り出し、あるいは破碎泥岩を用いて整地を行って小規模な平場を造成したことが確認された。
- ⑤この下位平場では当市では初の検出となる土葬土坑墓と考えられる土坑が確認されている。また土坑内より北宋銭が13枚出土したほか、在地及び常滑産中世陶器片も少量出土している。
- ⑥土葬土坑墓は形状からa.長軸値が短軸値に比して大きいもの、b.長軸値とが短軸値の比率が少ないものの、の2者があることから異なる埋葬方法が執り行われたものと考えられる。なおいずれも主軸方位は北東方向である。
- ⑦土葬土坑墓の中には、底面付近でこの周囲には存在しない黒色砂が少量確認できたことから、密教における葬送儀礼の一つである「土砂加持法会」が行われた可能性が推量できる。
- ⑧下位平場は小規模なものであるが、同様の平場状の地形が丘陵東側斜面に点在していることから、中世において本遺跡地は墓域として認識されていたものと思われる。なお被葬者層としては、近世絵図では本地点に「山守」の名称が見られることから、中世期においても小規模な領主、あるいは富裕農民層が存在したと推定し、この一氏族または集落構成員の墓域であった可能性が考慮できる。
- ⑨下位平場遺構群の年代観については、直接的な年代観を示す資料には恵まれてはいないが、上限は白石諸窯の製品の存在から13世紀後半以降とし、洪武通寶や永楽通寶などを含まないことから下限は15世紀代と幅広く捉えている。
- ⑩なお、名取市以南の宮城県南太平洋岸地域では、中世の供養塔あるいは墓標である板碑の分布は非常に少ないため、これまで中世墓制及び葬送については未解明な部分が多い。本地点においてもこれまでに板碑を含めた石製供養塔は確認されておらず、また過去に存在したという伝承も皆無である中で、中世墓群が営まれていたことが明らかとなった今回の成果は、今後の地域の中世墓制研究の上でも貴重な事例となつた。

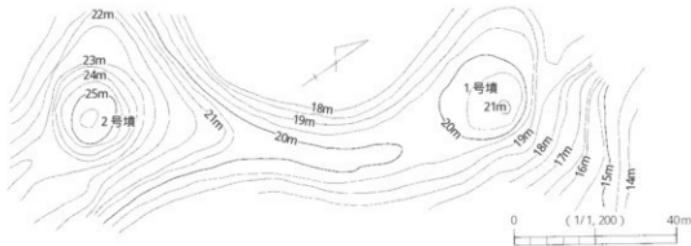
## 付編 昭和55年度調査「朝日古墳群」の成果概要

### はじめに

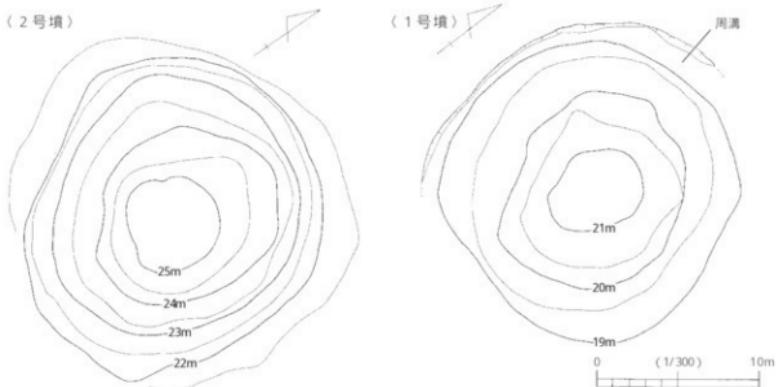
昭和55年度に調査が行なわれた朝日古墳群の成果については、これまで<sup>7</sup>岩沼市史<sup>8</sup>以外にはほとんど提示されていない。またそこでは古墳の全測図と、その規模等の概略のみが記載されただけである。今回同遺跡地内で調査を行い、報告をする機会を得たことにより、僅かな紙数ではあるが、昭和55年度に古墳盛土及びその周辺から出土した遺物について併せて図示することにした。しかしながら紙数の都合上、今回は土器・古銭についてのみ提示を行う。

### 古墳の形態・規模

調査で確認された古墳は2基である。北側を1号墳、南側を2号墳と命名している。表土を除去した段階で、両古墳とも墳丘裾部において旧表土と地山を削り出すことによって墳麓線を形成していることが確認されている。



第10図 朝日古墳群地形図(昭和55年度作成)



第11図 朝日古墳群1・2号墳

### 【1号墳】

規模は径約19mを測る円墳である。墳丘の高さは約2m。西側墳丘裾部では部分的に墳形に沿う形で幅約1m、深さ約30cmほどの周溝が存在する。墳丘盛土は頂部の径約12mの範囲で、地山であるローム質土の上面に約20cmほど堆積した旧表土を残し、その上に暗褐色シルトを主体とする盛土を1mほど積み上げている。なお盛土除去時、及び地山面検出時に主体部の有無のため精査を実施したが、主体部の存在を推定できるような痕跡は一切発見されていない。



第12図 昭和55年度の調査風景

### 【2号墳】

南側の一部で若干削平を受けているものの、規模は径約21mを測る円墳である。墳丘の高さは約3m。東側墳丘裾部では周溝が存在していた可能性も考慮できるが判然とはしていない。墳丘盛土は頂部の径約14mの範囲で、地山であるローム質土の上面に堆積した旧表土を残し、その上に暗褐色シルトを主体とする盛土を1mほど積み上げている。なお盛土除去時、及び地山面検出時に主体部の有無のため精査を実施したが、主体部の存在を推定できるような痕跡は一切発見されていない。

### 出土遺物

1・2号墳の両者とも、弥生土器片を盛土及び旧表土中に多く混入している。また表土中からは中世陶器(第9図13)、古銭(寛永通寶、仙台通寶)が出土している(註5)。このうち古銭については撒かれたような状態で出土したようであり、この墳丘上で近世において何らかの祭祀行為が行われた可能性もある。なお『岩沼市史』では「1号墳の墳丘裾部付近から高杯の脚部」、同様に「2号墳墳丘裾部付近から器種不明破片と土師器が出土した」との記述があるが、現在ではどの遺物を指しているのかは明らかではない。このためここでは最も多く出土した弥生土器片を含む土器類、及び古銭について提示する。なお前述したように出土石器については今回図示は割愛したが、内訳を示すとアメリカ式石鏃1点、打製石斧?3点、磨製石斧2点、石包丁2点などである。

本地点で出土した弥生土器については、器種組成としては甕、壺、鉢、高杯に分類されるほか、器面観察では以下のような分類が可能である。

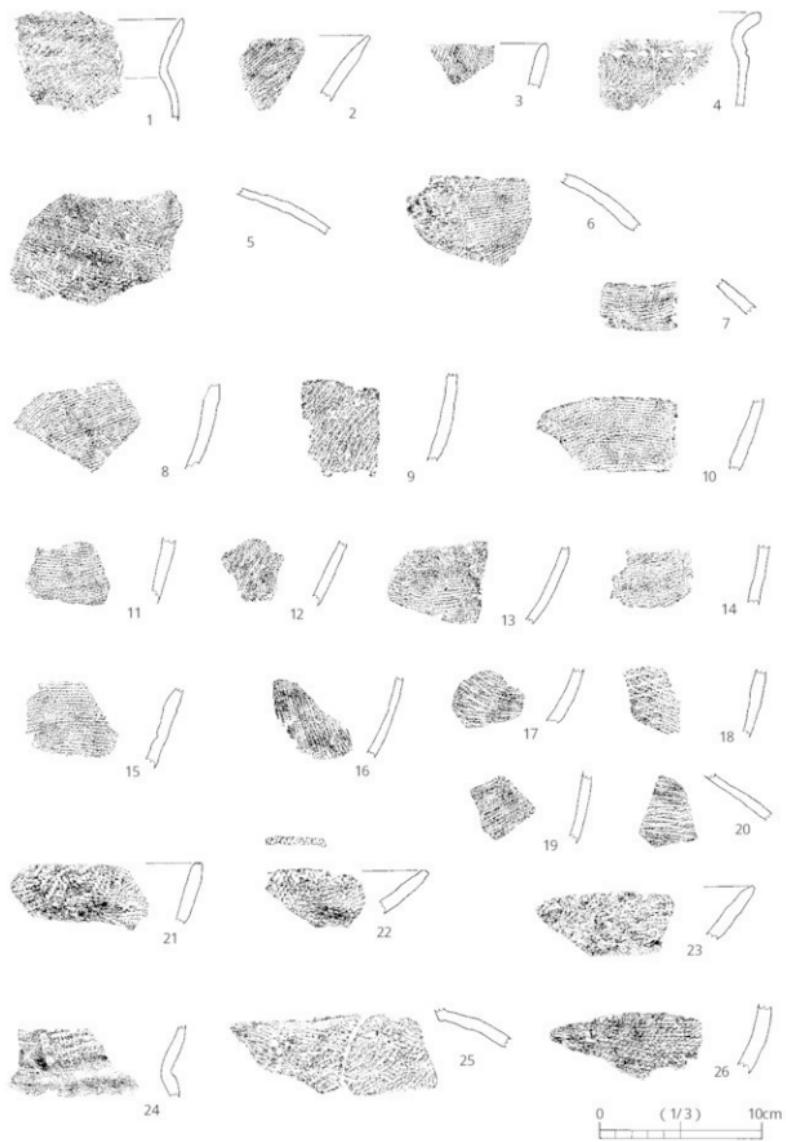
A類 繩文もしくは撚糸文を有するもの

B類 2本1単位の沈線を有するもの

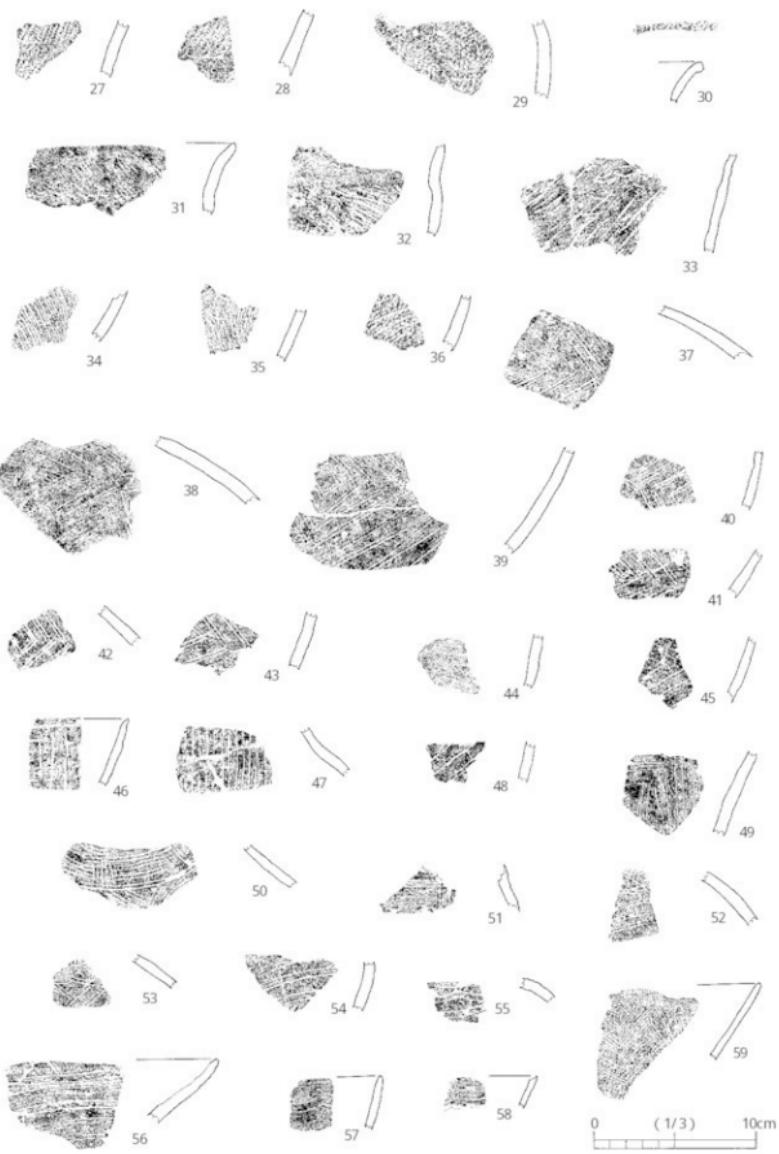
C類 ハケ目を有するもの

D類 沈線と繩文を有するもの

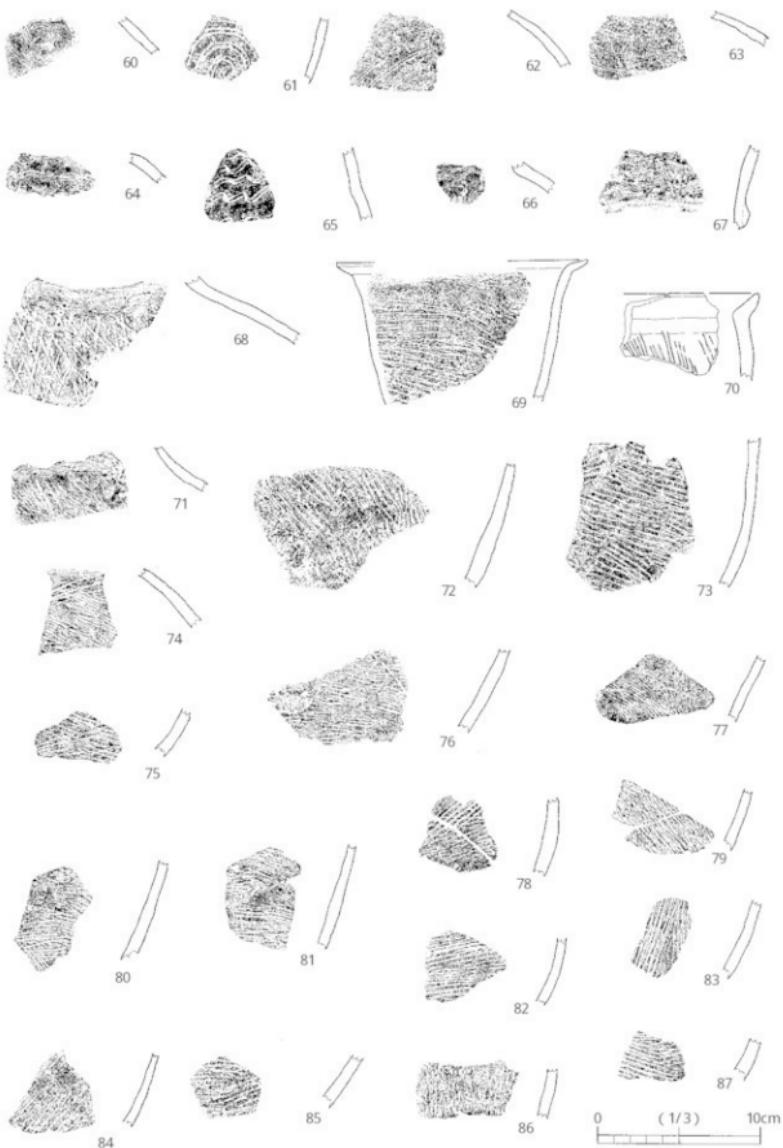
E類 ナデ調整のもの(摩滅を含む)



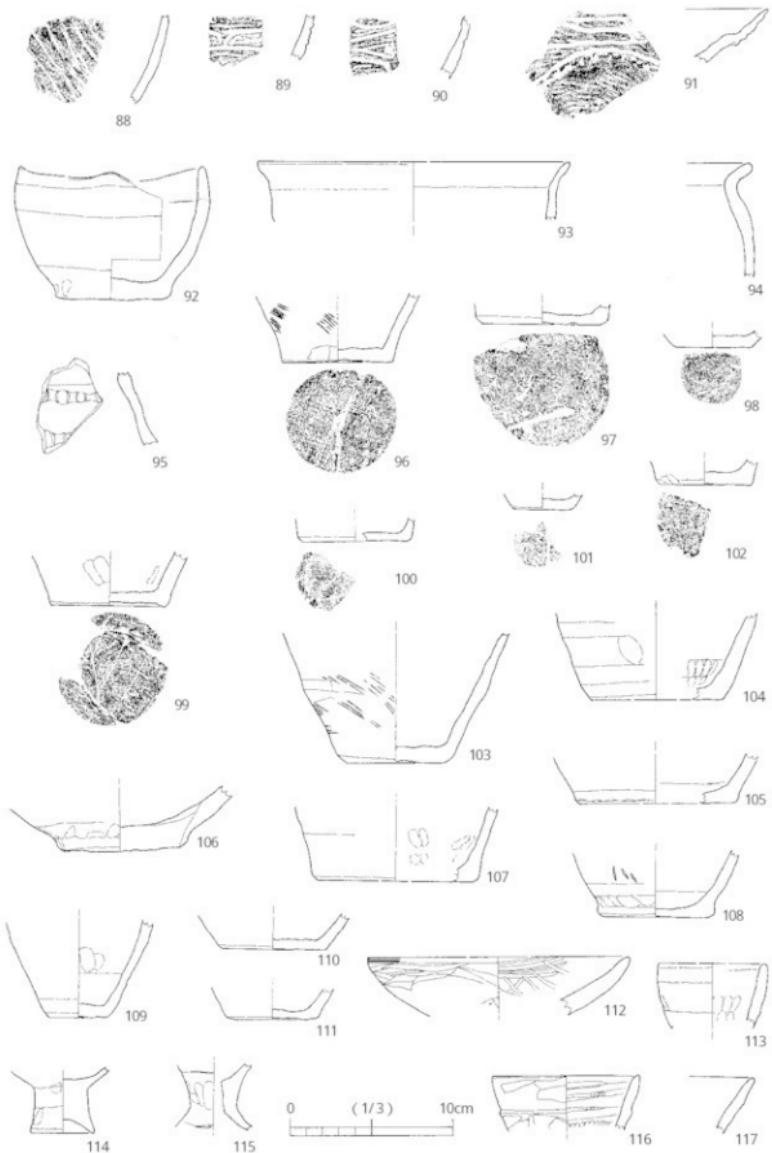
第13図 昭和55年度調査出土遺物(1)



第14図 昭和55年度調査出土遺物(2)



第15図 昭和55年度調査出土遺物(3)



第16図 昭和55年度調査出土遺物(4)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



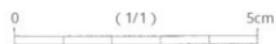
18



19



20



第17図 昭和55年度調査出土遺物(5)



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



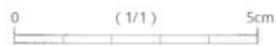
38



39



40



第18図 昭和55年度調査出土遺物(6)

このうち摩滅したために器面調整が不明なものを含むE類を除くと、出土点数としてはA類が149点で約38%を占め、次いでC類(126点約32%)、B類(111点約28%)、D類(8点約2%)となる。

A～D類をそれぞれ概観すると、A類の中では縄文と付加状を施すものがあり、このうち、縄文を施すものでは節の形状が小さいものが多い傾向にある。B類では菱形文(第4図37～45)、山形文(第14図59)などのほか、円形文(第15図60～63)、格子文(第14図46～51)、連弧文(第14図52～58)、波状文(第15図64～67)などがみられる。これらの土器にはいずれも雲母粒が多く含まれていることが特徴的である。C類にはやや幅の広いもの(第14図69・70、73、78、82・83、87)も含めているが、これらについてはハケというよりはむしろ櫛状工具による器面調整とも考えられる。D類は工字文(第15図89)、変形工字文(第15図90)のほか、口縁部下にキザミを有するもの(第15図91)も存在するが、全体量としては極めて少ない。

底部片では①布目痕を有するもの(第15図96～98、100、102)、②木葉痕を有するもの(第15図99、101)、③ヘラナデ、ナデ調整のもの(第15図103～111)があるが、③が最も多く、②は2点と非常に少ない。

これらの弥生土器片は、施文技法から概ね弥生時代中期後葉から後期初頭の土器形式である楕形圓式、十三塚式、天王山式に比定される土器群として位置づけられる(註6)。

このほか壊(第15図112)、筒型土器(第15図113)、器台と思われる土器片(第15図114)、高杯(第15図115)、壺(第15図116)、甌(第15図117)の土師器も出土しているが、出土位置の状況を考慮すると、いずれも古墳の年代観を比定する資料として扱うことには不安が残る。

## 註

- 1 なお、この製品と類似した特徴を持つ陶器片は、仙台市洞ノ口遺跡(仙台市教育委員会2005)でも出土しているとの情報を安達訓仁氏よりいただいた。この製品の流通範囲等の諸問題については今後の検討課題である。
- 2 白石諸窯のうち、一本杉窯跡群の操業期間は13世紀後半～14世紀前半頃とされているが、宮城県教育委員会1996、菊池逸夫2003)、本地点出土の第9図9のように未だ生産窯を特定できない在地産の中世陶器も多くあることから、一本杉窯跡群に後続する窯跡の存在も考慮して、ここでは年代幅を広く考えている。
- 3 ここで「袋状」としたのは、古銭検出のレベルでは同様の植物遺存体が発見できなかっただため、ムシロ等を敷いてはいないと判断したためである。
- 4 田中氏は年代的な平面形態の変遷として、墓坑の長軸-短軸で求められる長短比が有効であるとし、9世紀後半では2.5～3、12世紀後半～13世紀前半では2.4、14世紀後半～15世紀は1.8、16世紀は1.8と数值を示し、時代を追うごとに長短比が少なくなるという指摘をしている。しかしながら本地点のSK10は長軸2.26m 短軸0.84mであり、長短比は2.69となっている。
- 5 仙台通寔は鉄製であり、腐食が著しいため図示はできなかった。
- 6 ただし、天王山式に比定される土器は第16図91のほかは明確には認められていない。

## 引用・参考文献

- 相沢清利 2002 「東北地方における弥生後期の土器様相- 太平洋側を中心として-」『古代文化』第54巻第10号
- 赤澤靖章 2000 「出土土器の概要」高田B遺跡-第2分冊。仙台市文化財調査報告書第242集
- 岩沼市 1984 『岩沼市史』岩沼市市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査 細部調査』報告書・現況調査編。
- 岩沼市教育委員会 1980 「朝日古墳 跟地説明会資料
- 岩沼市教育委員会 2000 『引込横穴墓群発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第1集
- 岩沼市教育委員会 2004a 『下野郡館跡』岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡-第2地点』岩沼市文化財調査報告書第3集
- 岩沼市教育委員会 2004c 『鶴ヶ崎城跡-第3地点』岩沼市文化財調査報告書第4集
- 岩沼市教育委員会 2005a 『長徳寺前遺跡』岩沼市文化財調査報告書第5集
- 岩沼市教育委員会 2005b 『鶴ヶ崎城跡-第4地点』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 太田昭夫 1990 「宮城県における弥生時代土器編年研究の現状と課題」繩文文化検討会シンポジウム
- 菊池逸夫 2003 「陸奥の陶器生産-一本杉窯跡群-中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 佐藤宏一 1968 「宮城県栗原市長谷村室横穴古墳群『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県教育大学歴史研究会編
- 仙台市教育委員会 1994 『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集
- 仙台市教育委員会 1998 『柳生台畠遺跡』仙台市文化財調査報告書第230集
- 仙台市教育委員会 2005 『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集
- 田中則和 2002 「陸奥国」国府域の考古学的様相『議會・室町時代の奥州』高志書院
- 田中則和 2004 「宮城県」中世基資料集成-東北編- 中世基資料集成研究会
- 田中則和 2005 「東北地方中世墓の様相と画期」東北中世史の研究 下巻』高志書院
- 千葉宗久 2006 「原遺跡『いわぬま歴史散歩-166』河北新報岩沼専売所
- 東北福祉大学 2002 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第1次発掘調査概報
- 東北福祉大学 2003 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第2次発掘調査概報
- 東北福祉大学 2004 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第3次発掘調査概報
- 東北福祉大学 2005 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第4次発掘調査概報
- 東北福祉大学 2006 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第5次発掘調査概報
- 東北福祉大学 2007 『鶴ヶ崎城跡 岩沼要害』第6次発掘調査概報
- 東北歴史博物館 2005 「特別展古代の旅 -人ともの通るみち- 展示図録」
- 永井久美男 1994 「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会
- 名取市教育委員会 1998 『泉遺跡- 宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書-』名取市文化財調査報告書第39集
- 宮城県教育委員会 1977 「(3)長谷寺横穴古墳群『宮城県文化財発掘調査略報 昭和51年分』宮城県文化財調査報告書第48集
- 宮城県教育委員会 1984 『津山町柳津館山遺跡』宮城県文化財調査報告書第102集
- 宮城県教育委員会 1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第159集
- 宮城県教育委員会 1996 『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集
- 村田町教育委員会 2006 『音生館跡』村田町文化財調査報告書第22集

朝日古墳群 出土遺物観察表

第2表 上位平場出土遺物観察表

図番号	出土位置	器種・部位	整形・文様の特徴等	整理番号	図版
9-1	S K 3	壺・肩部	外：地文縞文（R L） 内：ヘラケズリのちナデ	7	8-7
9-2	S K 3	壺・肩部	外：沈線による渦巻き文 内：ナデ	8	8-8
9-3	S X 1	壺・肩部	外：地文縞文（L R） 内：ナデ	11	8-11
9-4	S K 4	壺・口縁部	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	10	8-10
9-5	S K 5	壺・肩部	外：斜行沈線 内：ナデ？（剥離）	6	8-6
9-6	S K 2	高杯・环部	外：沈線 内：ミガキ・ナデ	9	8-9
9-7	包含壺	壺・肩部	外：横位・破位沈線 内：ナデ	12	8-12
9-8	包含壺	壺・口縁部	外：ナデ 内：ナデ	13	8-13

第3表 下位平場出土遺物観察表

図番号	出土位置	器種・部位	整形・文様の特徴等	整理番号	図版
9-9	S K 1 0	壺・肩部	中世陶器 外：ナデ・ヘラナデ 内：ヨコナデ・オサエ	1	8-1
9-10	S K 1 1	壺・肩部	中世陶器 外：ナデ 内：ナデ・オサエ	2	8-2
9-11	S K 1 5	壺・肩部	中世陶器 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・オサエ	5	8-4
9-12	S K 9	壺・肩部	中世陶器 外：ナデ、一部に線刻 内：ナデ・オサエ	3	8-3
9-13	555年資料	壺・底部	中世陶器 外：縦位ヘラケズリ・ヘラナデ 内：ヨコナデ・ナデ 底径18.2	4	8-5

第4表 下位平場出土遺物(古銭)観察表

図番号	出土位置	種別	銭 貨名・初鋤年・備考	整理番号	図版
9-14	S K 1 5	古銭	景祐元寶（初鋤年；1034年） 北宋 真書 他に2枚付着	151	12-41
9-15	S K 1 5	古銭	元祐通寶（初鋤年；1086年） 北宋 行書	152	12-42
9-16	S K 1 5	古銭	治平元寶（初鋤年；1064年） 北宋 真書	153	12-43
9-17	S K 1 5	古銭	嘉祐通寶（初鋤年；1055年） 北宋 真書	154	12-44
9-18	S K 1 5	古銭	元祐通寶（初鋤年；1086年） 北宋 真書	155	12-45
9-19	S K 1 5	古銭	至和元寶（初鋤年；1054年） 北宋 真書	156	12-46
9-20	S K 1 5	古銭	景祐元寶？（初鋤年；1064年？） 北宋 真書？	157	12-47
9-21	S K 1 5	古銭	熙寧元寶（初鋤年；1066年） 北宋 真書	158	12-48

第5表 昭和55年度調査出土遺物 土器 観察表

図番号	出土位置	器種・部位	整形・文様の特徴等	整理番号	図版
12-1	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（R L）・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	26	8-26
12-2	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R）、口唇部にキザミ 内：ヨコナデ	19	8-19
12-3	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R） 内：ナデ	107	10-107
12-4	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R）・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	103	10-103
12-5	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ヨコナデ	128	11-128
12-6	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	114	11-114
12-7	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	34	8-34
12-8	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ナデ	125	11-125
12-9	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ？（剥離）	136	11-136
12-10	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	41	9-41
12-11	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ？（剥離）	37	9-37
12-12	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ？（摩滅）	69	9-69
12-13	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	46	9-46
12-14	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	35	8-35
12-15	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ナデ・オサエ	36	9-36
12-16	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ・オサエ	110	10-110
12-17	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	95	10-95
12-18	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ナデ・オサエ	42	9-42
12-19	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	96	10-96
12-20	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R）・ナデ 内：ナデ	47	9-47
12-21	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R）・ナデ 内：ナデ	85	10-85
12-22	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R）・ナデ・口唇部に縞文（L R） 内：ナデ	112	11-112
12-23	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（L R）・ナデ 内：ナデ	137	11-137
12-24	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R）・ナデ・オサエ 内：ナデ	94	10-94
12-25	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ナデ	133	11-133
12-26	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	54	9-54
13-27	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	93	10-93
13-28	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R）・ナデ 内：ナデ	68	9-68
13-29	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R）・ナデ 内：ナデ	92	10-92
13-30	埴丘封土中	壺・口縁部	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・口唇部にのみ縞文（L R）	104	10-104
13-31	埴丘封土中	壺・口縁部	外：縞文（R L）・オサエ 内：ヨコナデ	138	11-138
13-32	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L）・ナデ 内：ヨコナデ？（摩滅）	126	11-126
13-33	埴丘封土中	壺・肩部	外：縦系（L） 内：ナデ？（剥離）	62	9-62
13-34	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（R L） 内：ナデ	18	8-18
13-35	埴丘封土中	壺・肩部	外：縞文（L R） 内：ナデ	21	8-21

図番号	出土位置	器種・部位	整形・文様の特徴等	整理番号	図版
13-36	埴丘封土中	壺・肩部	外：縹文（LR） 内：ナデ	72	9-72
13-37	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	121	11-121
13-38	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	120	11-120
13-39	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	122	11-122
13-40	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	33	8-33
13-41	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	75	9-75
13-42	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	61	9-61
13-43	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	51	9-51
13-44	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	44	9-44
13-45	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による變形文 内：ナデ	89	10-89
13-46	埴丘封土中	鉢？・口縁部	外：車状工具による格子文 内：ヨコナデ	20	8-20
13-47	埴丘封土中	壺・肩部	外：車状工具による横位沈線と横位沈線 内：ナデ	76	10-76
13-48	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の斜行沈線 内：ナデ	90	10-90
13-49	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による格子文 内：ナデ	106	10-106
13-50	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による格子文と山形文 内：ナデ	103	10-103
13-51	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による格子文 内：ナデ	115	11-115
13-52	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の斜行沈線と連弧文 内：ナデ	43	9-43
13-53	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による連弧文 内：ナデ	108	10-108
13-54	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の弧状沈線 内：ナデ	109	10-109
13-55	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による連弧文 内：ナデ	80	10-80
13-56	埴丘封土中	高杯？・口縁部	外：2本一單位の弧状沈線 内：ヨコナデ？（剝離）	123	11-123
13-57	埴丘封土中	鉢？・口縁部	外：2本一單位の連弧文・横位沈線 内：ヨコナデ	105	10-105
13-58	埴丘封土中	鉢？・口縁部	外：2本一單位の沈線による連弧文 内：ナデ	66	9-66
13-59	埴丘封土中	鉢？・口縁部	外：2本一單位の沈線による山形文・横位沈線 内：ヨコナデ	135	11-135
14-60	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による高唇文 内：ナデ	29	8-29
14-61	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の沈線による高唇文 内：ナデ	56	9-56
14-62	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の弧状沈線 内：ナデ	30	8-30
14-63	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の弧状沈線 内：ナデ	32	8-32
14-64	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の波状沈線 内：ナデ	58	9-58
14-65	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の波状沈線 内：ナデ	124	11-124
14-66	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の横位沈線と山形文 内：ナデ	50	9-50
14-67	埴丘封土中	壺・肩部	外：2本一單位の波状沈線・隆蒂は粘土貼付 内：ナデ	83	10-83
14-68	埴丘封土中	壺・肩部	外：車状工具による網目文・ナデ 内：ナデ・オサエ	31	8-31
14-69	埴丘封土中	機・口縁部	外：八ヶ口・口縁部はヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ 口径15.4	84	10-84
14-70	埴丘封土中	機・口縁部	外：八ヶ口・口縁部はヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	16	8-16
14-71	埴丘封土中	壺・肩部	外：八ヶ口・ナデ 内：ナデ	100	10-100
14-72	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ口・ナデ 内：ナデ・オサエ	111	10-111
14-73	埴丘封土中	機・肩部	外：八ヶ口 内：ナデ	127	11-127
14-74	埴丘封土中	壺・肩部	外：横位・斜位の八ヶ 内：ナデ	60	9-60
14-75	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	74	9-74
14-76	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	22	8-22
14-77	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	52	9-52
14-78	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	87	10-87
14-79	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	99	10-99
14-80	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	63	9-63
14-81	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	98	10-98
14-82	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	49	9-49
14-83	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	88	10-88
14-84	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	70	9-70
14-85	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	59	9-59
14-86	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	38	9-38
14-87	埴丘封土中	機？・肩部	外：八ヶ 内：ナデ	48	9-48
15-88	埴丘封土中	機？・肩部	外：燃系(R) 内：ナデ	17	8-17
15-89	埴丘封土中	壺・肩部	外：沈線による工字文？・縹文(R) 内：ナデ	86	10-86
15-90	埴丘封土中	壺・肩部	外：沈線による変形工字文？・縹文(R) 内：ナデ	55	9-55
15-91	埴丘封土中	壺・口縁部	外：武綱・キサニ・縹文(LR) 内：ヨコナデ	129	11-129
15-92	埴丘封土中	鉢	外：ナデ 底部付近はオサエ、底面はナデ 内：ナデ 口径11.4、底径7.2、器高6.3	118	11-118
15-93	埴丘封土中	機・口縁部	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ 口径19.2	53	9-53
15-94	埴丘封土中	機・口縁部	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	25	8-25
15-95	埴丘封土中	壺・肩部	外：押印・ナデ 内：ナデ	116	11-116
15-96	埴丘封土中	機？・底部	外：布目縦・縹文(RL)・ヘラケズリ・ナデ 内：ナデ 底径6.8	131	11-131
15-97	埴丘封土中	機？・底部	外：布目縦・ナデ 内：ナデ 底径7.2	81	10-81
15-98	埴丘封土中	機？・底部	外：布目縦・ナデ 内：ナデ 底径4.4	40	9-40
15-99	埴丘封土中	機？・底部	外：木葉彫・オサエ・ナデ 内：ナデ・オサエ 底径7.0	130	11-130
15-100	埴丘封土中	機？・底部	外：布目縦・ナデ 内：ナデ 底径6.5	82	10-82
15-101	埴丘封土中	機？・底部	外：木葉彫・ナデ 内：ナデ 底径3.5	28	8-28
15-102	埴丘封土中	機？・底部	外：布目縦・オサエ・ナデ 内：ナデ 底径5.6	39	9-39
15-103	埴丘封土中	機？・底部	外：八ヶのナデ 内：ナデ 底径6.0	119	11-119
15-104	埴丘封土中	機？・底部	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ 底径8.2	14	8-14

図番号	出土位置	器種・部位	整形・文様の特徴等	整理番号	図版
15-105	埴丘封土中	楕?・底部	外：ナデ 内：ナデ 底径9.2	15	8-15
15-106	埴丘封土中	楕?・底部	外：オサエ・ナデ 内：ナデ 底径7.0	132	11-132
15-107	埴丘封土中	楕?・底部	外：ナデ 内：オサエ・ナデ 底径10.2	27	8-27
15-108	埴丘封土中	楕?・底部	外：楕(文: R1)・オサエ・ナデ 内：ナデ 底径7.3	79	10-79
15-109	埴丘封土中	壹?・底部	外：ナデ 内：オサエ・ナデ 底径3.6	97	10-97
15-110	埴丘封土中	跡?・底部	外：ナデ 内：ナデ・ヨコナデ 底径6.0	67	9-67
15-111	埴丘封土中	跡?・底部	外：ナデ 内：ナデ・ヨコナデ 底径5.6	102	10-102
15-112	埴丘封土中	环・口縁部	外：ヘラナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ 内：ヘラミガキ・ナデ 口径16.2	78	10-78
15-113	埴丘封土中	筒形土器・口縁部	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ 輪積南明瞭 口径6.8	23	8-23
15-114	埴丘封土中	器台?・脚部	外：ナデ・オサエ 内：ナデ 摩滅する 器台径4.0	140	11-140
15-115	埴丘封土中	高杯?・脚部	外：ス燥・ナデ・オサエ 内：ナデ 摩滅する	113	11-113
15-116	埴丘封土中	壹?・口縁部	外：ヘラナデ・ナデ 内：ヘラミガキ 口径9.1	77	10-77
15-117	埴丘封土中	楕・口縁部	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	24	8-24

第6表 昭和55年度調査出土遺物 古鉢 激察表

図番号	出土位置	種別	鉢 貨名・備考	整理番号	図版
16-1	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	159	12-1
16-2	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	160	12-2
16-3	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	161	12-3
16-4	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	162	12-4
16-5	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	163	12-5
16-6	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	164	12-6
16-7	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	165	12-7
16-8	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	166	12-8
16-9	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	167	12-9
16-10	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	168	12-10
16-11	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	169	12-11
16-12	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	170	12-12
16-13	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	171	12-13
16-14	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	172	12-14
16-15	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	173	12-15
16-16	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	174	12-16
16-17	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	175	12-17
16-18	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	176	12-18
16-19	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	177	12-19
16-20	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	178	12-20
17-21	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	179	12-21
17-22	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	180	12-22
17-23	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	181	12-23
17-24	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	182	12-24
17-25	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	183	12-25
17-26	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	184	12-26
17-27	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	185	12-27
17-28	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	186	12-28
17-29	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	187	12-29
17-30	埴丘封土上面	古鉢	永樂通寶(初鋤年; 1408年) 明	188	12-30
17-31	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	189	12-31
17-32	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	190	12-32
17-33	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	191	12-33
17-34	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	192	12-34
17-35	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	193	12-35
17-36	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	194	12-36
17-37	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	195	12-37
17-38	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	196	12-38
17-39	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	197	12-39
17-40	埴丘封土上面	古鉢	寶永通寶	198	12-40

# 写 真 図 版

図版 1



調査前風景  
( 北東から )



上位平場  
SK 1 土層断面  
( 東から )



SK 1 完掘  
( 西から )

図版 2



上位平場

S K 2 土層断面

( 西から )



上位平場

S K 2

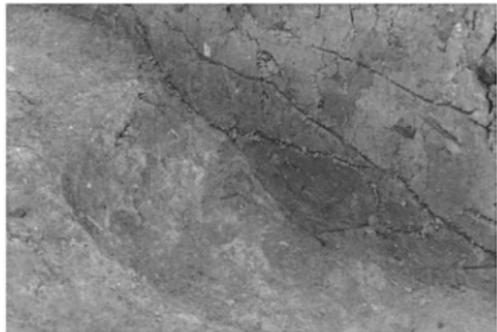
( 西から )



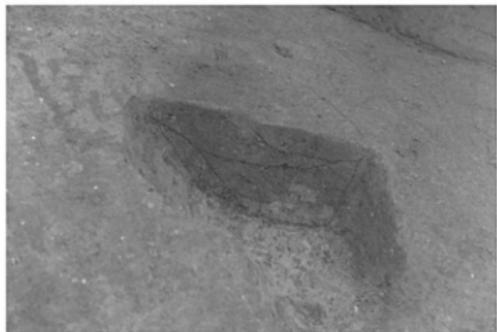
上位平場

S K 3 土層断面

( 東から )



上位平場  
SK 4 土層断面  
( 東から )



上位平場  
SK 5 土層断面  
( 東から )



上位平場  
SK 5 土層断面  
( 西から )

図版 4



上位平場

S K 6

( 西から )



上位平場

S X 1 土層断面

( 西から )



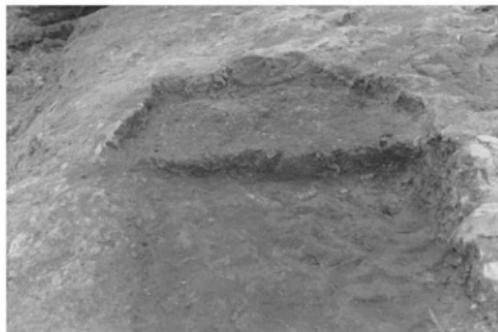
上位平場

全景

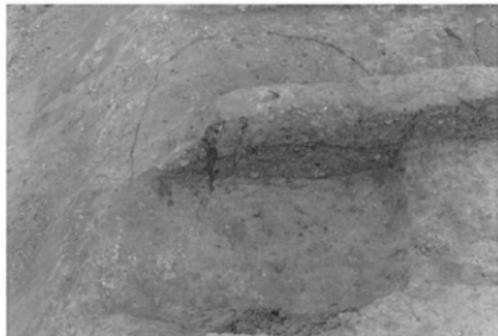
( 西から )



下位平場  
遺構確認状況  
(南西から)



下位平場  
SK 8 土層断面  
(北から)



下位平場  
SK 11 土層断面  
(北から)

図版 6



下位平場  
S K 10 土層断面  
( 北から )



下位平場  
S K 10  
( 北から )



下位平場  
S K 7 土層断面  
( 東から )



下位平場  
SK 15 土層断面  
(南から)

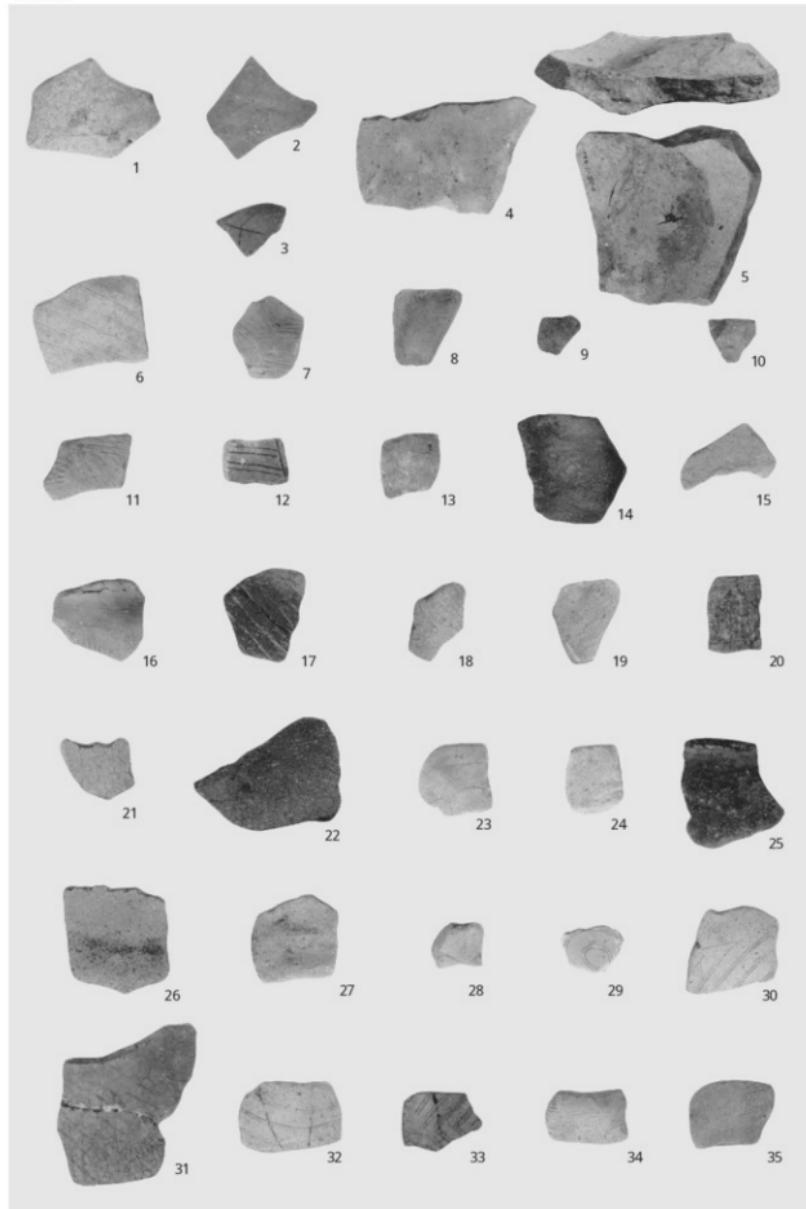


下位平場  
SK 15 古銭  
(東から)

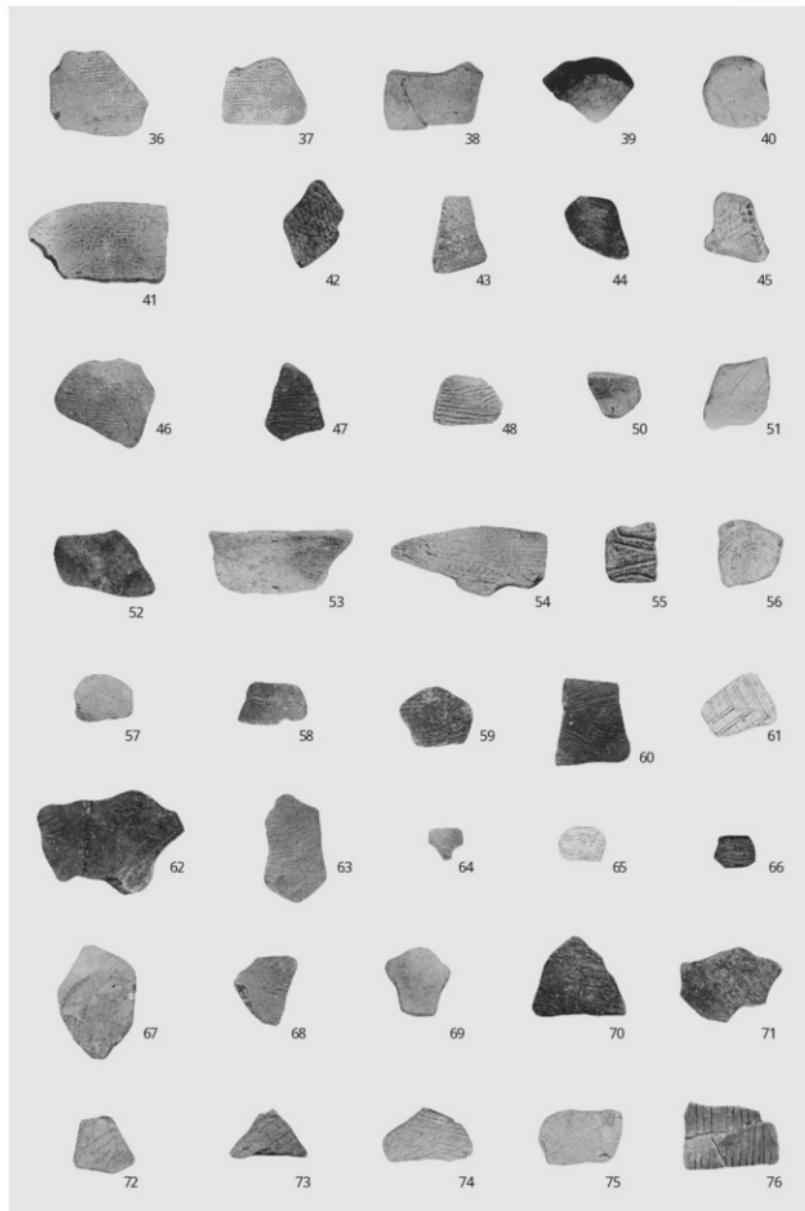


下位平場  
遺構完掘状況  
(南から)

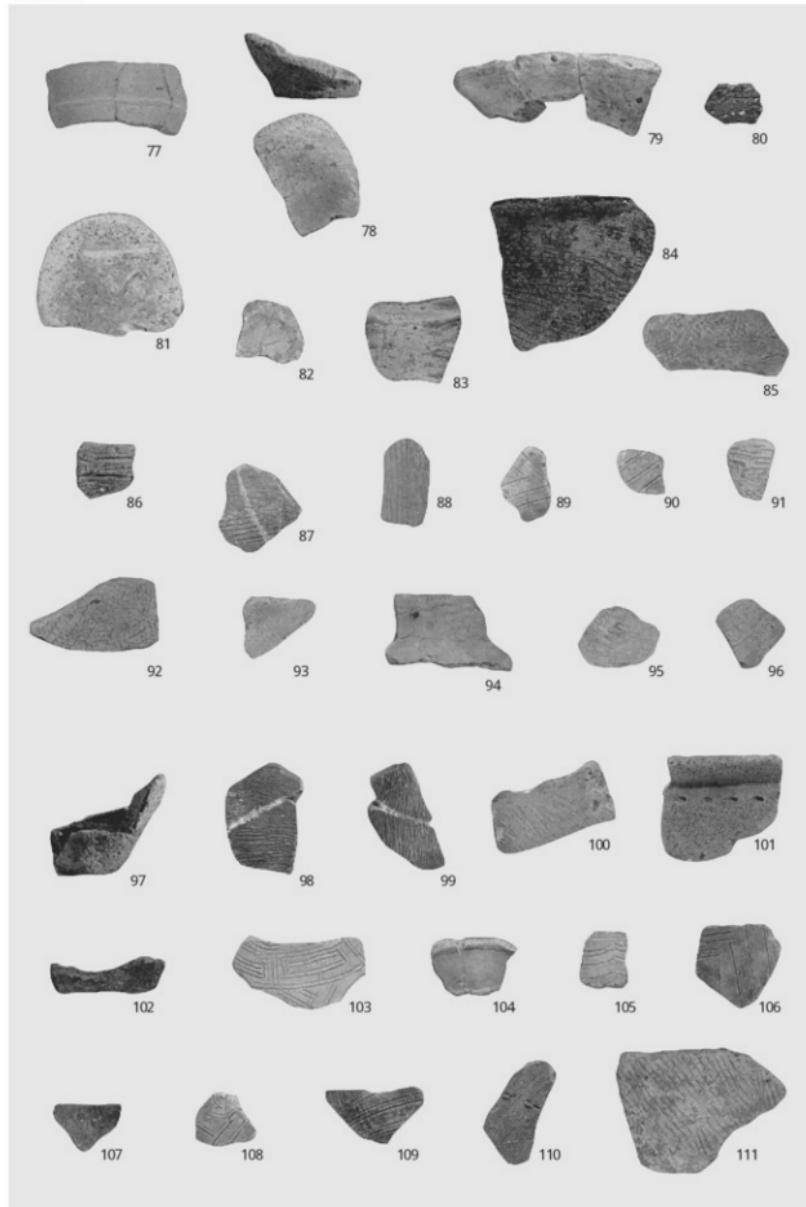
图版 8



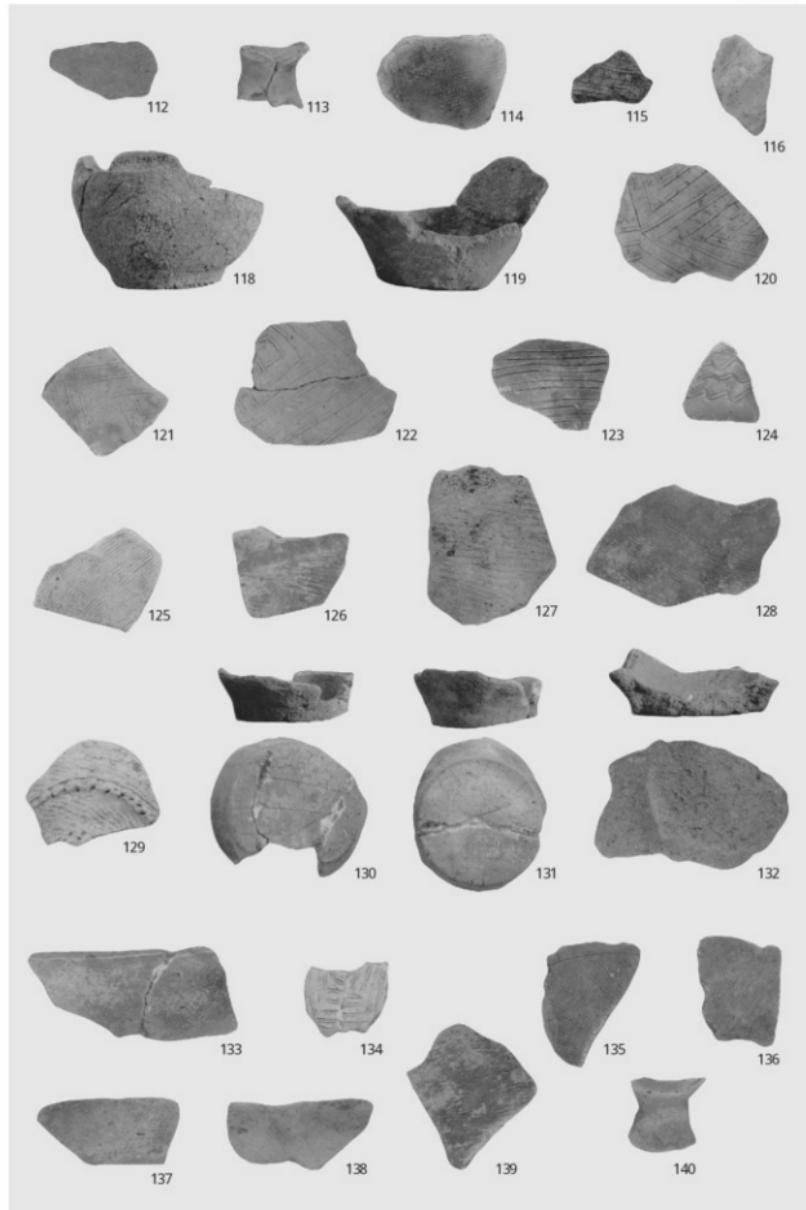
圖版 9



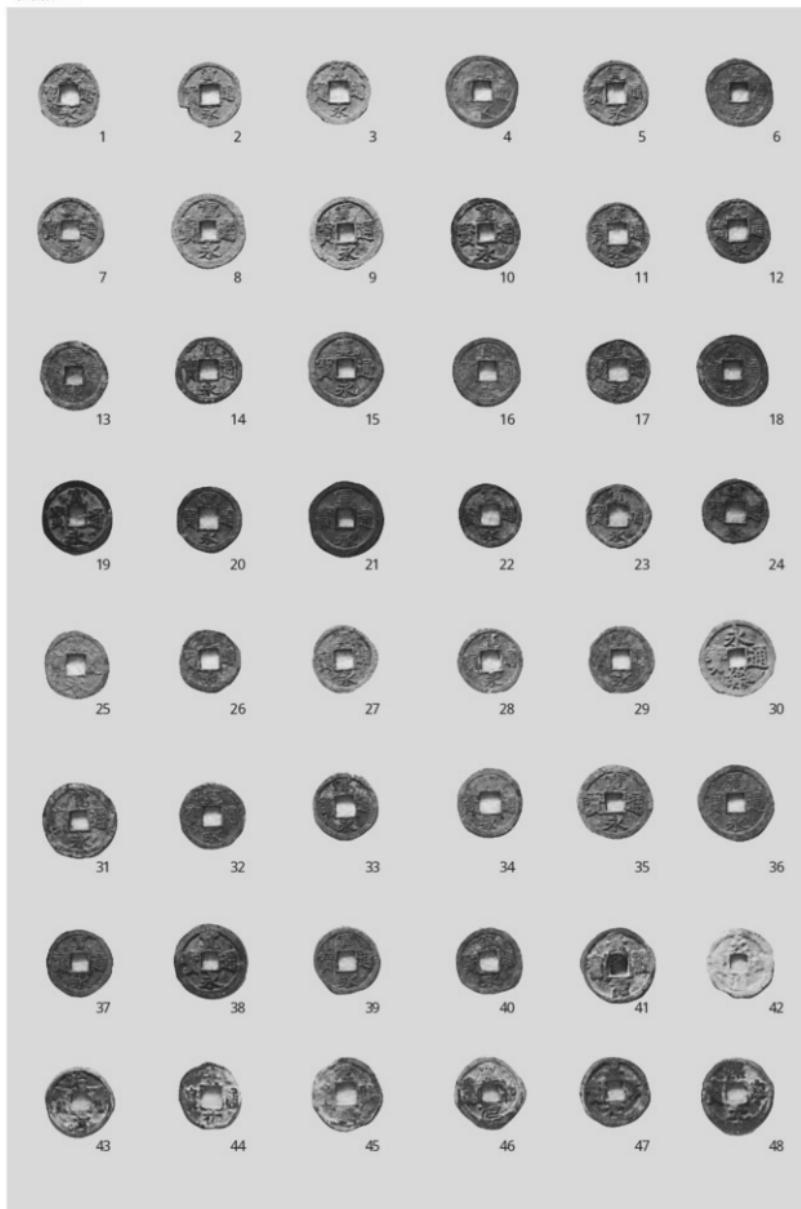
图版10



図版11



图版12



## 報告書抄録

ふりがな	あさひこふんぐん						
書名	朝日古墳群						
副書名	宅地造成及び取付道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第7集						
編集者名	川又隆央						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111						
発行年月日	西暦2007年3月31日						
所収遺跡名	所収遺跡名	市町村コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
朝日古墳群	朝日古墳群 朝日1丁目	042111 15037	38° 6' 31"	140° 51' 41"	20050607 ~ 20050706	137m <sup>2</sup>	宅地造成及び 取付道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
朝日古墳群	包含地 ・ 古墳	弥生時代	土杭		弥生土器		
		中世	土杭 溝状遺構		中世陶器 古銭	当市では初の検出事例となる土葬土坑墓を確認。 丘陵東斜面において墓域形成の可能性。	

